

蟹の焼藻

三

僧5

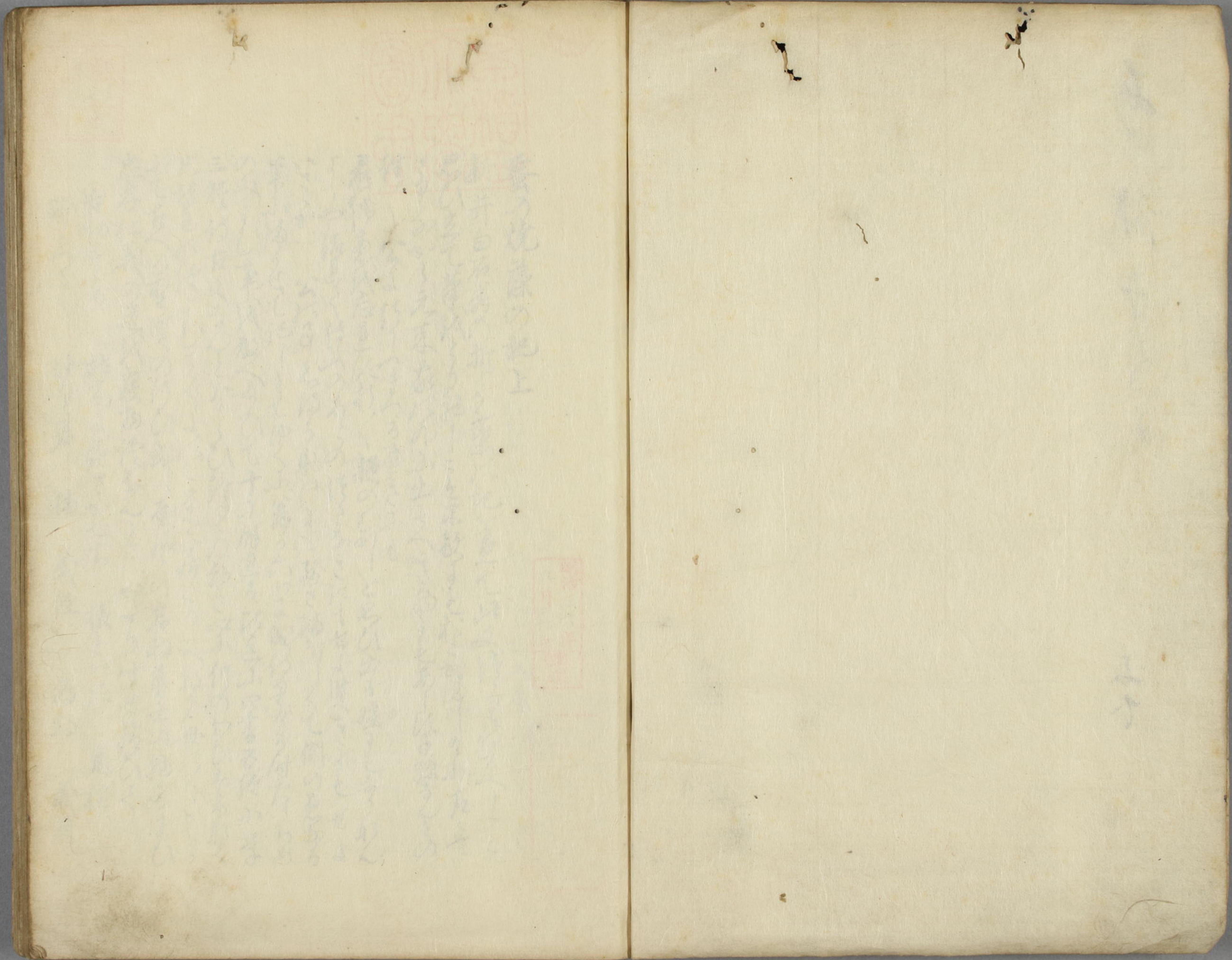
321



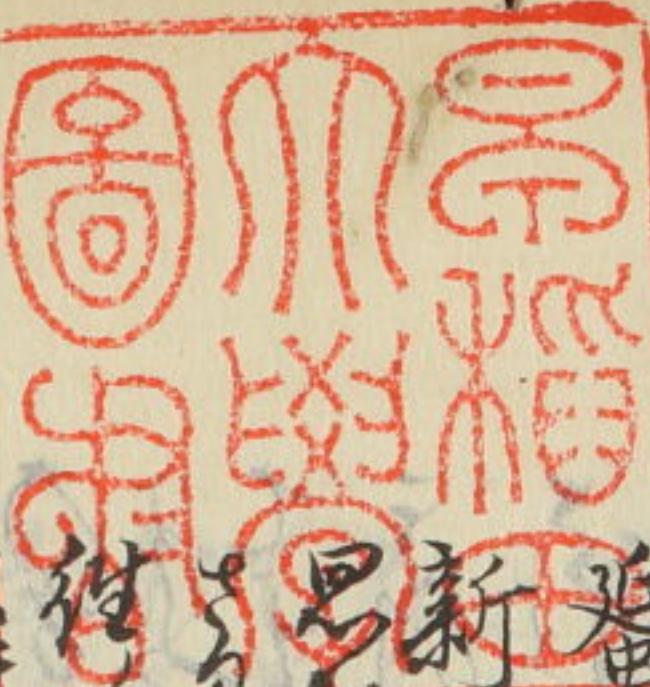
3 4 5 6 7 8 9 30 1 2 3 4 5 6 7 8 9 40 1 2 3 4 5 6 7 8 9 50 1 2 3 4

東方先生集

卷下



門號
321
卷



遊の焼藻の記上

明治三十六年九月二十六日 驟求

新井白石翁の折りと案れ記を以て序文は略す。一と
思ひて草稿よりかへうそ不敵すとがいかず。左を
書く元本が小出でてあともあらず。孫もあ
従う。公よほくふまうるをきふも
君傳ある我志またお、親のじかと只ひ歩る様すをうか
すや。源氏くは人のあるのはこあきにもせよ賢きもせよ
せよ
さか 公はるむらむ助けよ。おきゆりくて例の悪あら
筆小ゆせて記す。せゆく小翁つたはゆけりから府だらめ
のぬよし事成教へりひて十小角見ち以て小口書る。近小学
三経古文うんとすくい経をね幼きゆ小口のわいをあがく
只持主ひ經よしてくよめに是く所うち又鉛ア母ひるこも
かそちのを賃のりい或へ重あとの名ね勇士のゆるまし
忠志に義の道残度あらかじにかづり少せ経ひく
右也さくわ
祐あよ花さかせぢ、猿といふ
所つき
ゆき君 楠 義経
右也
義貞

岡子騫

伯倫

曹子
孟母

あへものあからりを、いく度々すう子耳小姓ひき今し程
只じ生ぬまへ、嘵旧れ涙くもら御。さふらがるゆくやうつ
とわく書減くろ事けいとそく。て後名を記縦軍達
淨陽被奉れ教じ乞言あり書毎よおもろくて日く不よ
まいかきとも幼きはわけをうふみの足よくね。うく
て後めらぬまく誠は漢文きくよ和氣と心もとまく
又まく文をも書ひとてうち龜をもよしもく傍毛を東
て見うてき方せねるをく史記えんとく文ハ外祖文

詣訪秋雨俗名伊織元寄合
の方よああまで見うて、うとも幼きてんじて画せんぢよ
すよ余はもせん十二の家うち種を力め業を学び、先
てう後ハ彼業の面白くと日々あけられ極苦よ出あが
て川着きわよれもお城うて月日飛送りほきは
さかの聲き附有ゆ。墨書五經はくじも四年う内う當

志は早とくりては十六をもえ、とぬ何う時被書籍とぞう先
にうふ、とくか序う事多くはりとどもたう我わうき妙
あるす。小是くち苦なるいもく事うんも序うくより
て着物をもくとすまはるむる後よ是くち無意に書庵中
身ひと人のねうろ哉のまくからよ傷あくよゆくようを
かうれよく、きへうきてすとくすも出来ぬまく、幼き、内
母は母誠あり、ゆは思ひあくしてう今書とくよきよ難
みをえてゆくね是翁のがくの誠悔ねからせ後うまく
本仰る時乳母のいへくてせ代がひくかくして令たをかう
をうゆかふたらねの禮う多ひまうをや氣積の病
伊達うらすれや、うる事被やう承すれんとねまに増毛
浦あ入うくしてみいかね大勢れ相あふ相々々あらへき事
うんとく、とからくしもするの相よんは所うをはすすわ
まいて眷うえの事よまうて二年五の事あ智とゆつも傳て
あうら年は暮大浦あへ湯島へして松浦坐まし組す事
去秋七月大坂の 市体の宿直よなまぬね一やをう往

餓

佛様のうちがあらそ隊中あらうとまよ一組卒人を
あひりよ割て督すう廿人一下船のうち小年久遠門ともし
名と併びて平成あらる者多よ外 故ひ役す事神佛も延
きう毎日御よりて安否とぞい九時と皆打ことアモ彼
小屋よ傍ろ東の茅葺と順とまて小屋よ身うて守寺以
まくへ立ふ難候りて退散ひる

此條そしらへ核みて俗寫れ核よんじく一五社を
事よて若も立ち立たるすハシヨリがますすうう
胡夕彼伊豆よ舞つゝ事核つの出入も督すう蓋下す
よあく上まとおむけ非ハ程と稱て舞つゝい故人是古くら
の俗習也翁にたもく實よす紙すふよどと稱 やはらこう
すハ年賀おも口成因て所うし一佛様中あるの萬政
二隊勇士百人至る従來一して日俄送うらふ西をアテモ
このみ思ひ無れも好く貴しと云ふある人も又も東俄
足くも哲すわがく賢者をアレタ年以恩り豆野

連て云ふをのこすのみ浮世のはらとソーアト、かくの
事にこそ有りて思ひくゆよへ不くそゑもとねえち
かく離れて一年う往大坂の宿西よしに事へ舞うらぬ
とも思つて生後立高きを江戸よりぬきに孤相處あらん
易くゆれ云到て江馬某平奮ハシマツルは少額ハシマツル金ハシマツルとよハ歴度も
遠かず車かと殊小急すう多日不従來あらうら小口書の
末後と教へすう後自ても俗の如しまま後ハ字代差あ
るゐ也と云ふるこそ本意も念二段二條の宿直小包
廻死前よすうて三日の事なり。彼も是もと承りありまく
て嘉政へ納めうる事なり。彼も是もと承りありまく
安永七年のひより。先妻の兄石野忠奮ハシマツル書院ハシマツル三言集
親の内すり候是より一備用金多くて困窮等閑なし
さうふらはせぬ翁上方とも十分よハなかりつとも厄災
もあり三年小室家京大阪の立高よれをアモ一倍の巨室行
捨て事ありて内子の通因させま逼迫すときアモ候く

よまとあーして助けたり石井平彦は僕は森門お馬はあら
紫面七左衛門お食事あんと忠臣^{一頭}と申て金を浅草花街
をんともあらひよたまえ貴成れまつあせの人情
詫わねの翁の洋領高内税米百俵の内百俵と毛券契の
詫とす三十斤は修業^金とからり忠石井奉勤の連
綿を補足^すすは十修金^忠と申て御石井奉勤の連
詫のひくとえう不足の上より申て詫年うてさはを
通とせしはおもけらしせん今もすく筆へきくへ
二字体の頃からは實よ懐のりかねるはよみの假柴田
森門さんとのむき小物^をふくらむ翁の老の陽の
門所ある小石井家因城に移らせ先君ありそくが
飢渴と後をせらるる志^を去来弱成男キタケル一朝の秋葉
変死を知らて何をか詫目判之の妻^を加^スる事に
よもて詫生所をおもて山傍主役林より詫うる所を

翁を見ゆつと石井の店をあゆみあひうち毛裏
找はねゆう思ひとどく事ふらし翁をかせ
荷をあらう人口も、かくやと思へ等閑に人を翁をかせ
主を不被石井の妻を成母を翁をかせと云是と会
たくてんやもく極くのくらべてのつひにほり御事と
せんもく自らてとこなくて店をあ翁驗を驗をもす
年高をね森山といふ事をみて店をの組の方をお
奈をあらうといふ事を辛にて事をよしと石井
もゆかをあらう元の長庵を立成りぬをゆ翁をあ
めすら候り翁をうかうすりんとのよいぬ事をいたと
お住を成かくらう今を考らば湯を浴す
翁を審年を考らばりて我詫小はそりゆくまろち
先をお學の代せよとてみづ大學海宿をと教へり
よほへ文藝のをひき後ま因ふ又を翁のをす多く
ありくらは是を成あて考らせらまは小普請を詫をほどり

あやし以其中か加えず死のアノかと清らか近まは
江作後をもれ、篆條よ学文、軍字子天文字すむむ事と
哉ら自てり。余不筆年ハ御家括を立ひ得る方ケ筆よ
之書よ。お是の付筆年、手稿とスミーとあり
名の主序よ於て語て出。モテ成因徳。アリ。太徐矣。貞
久被見かの所詮よ出で是哉。アリ。五毛。感ふ。一。是は方と
翁よと。主。之。之。感。一。我。翁。も。來。も。わ。さ。く
ぬ。主。首。夏。氏。の。主。ア。ト。モ。ア。ト。往。の。事。シ。ラ。学。文。ハ。足。ム
新。山。某。済。生。主。あ。の。復。應。と。云。と。モ。近。き。わ。ら。ふ。篤。主。の。傷。者。を
す。り。と。教。え。は。書。五。經。行。と。主。後。と。仕。立。く。不。幸。ア。ヒ。て
被。刺。山。病。して。世。故。を。ね。は。あ。る。こ。そ。レ。ヒ。と。承。ひ。れ。る。松
ひ。み。シ。ナ。カ。く。し。テ。一。く。る。う。ら。中。怪。な。め。と。云。志。學。忘。え
を。店。家。丹。波。主。時。ト。先。て。活。ア。ム。け。代。相。左。正。娘。石。安。妻。守。
石。川。忠。房。岩。次。郎。ろ。ん。と。何。と。安。キ。沙。浮。う。く。頻。す。して。
や。して。近。ミ。ヤ。う。り。か。と。海。今。れ。ん。と。う。を。近。行。あ。つ。る。也。
齋。年。モ。テ。中。小。加。く。て。復。系。も。う。佐。は。彼。左。助。我。翁。ヘ。モ。セ
ざ。く。あ。づ。ね。復。見。モ。只。一所。何。う。き。下。筆。年。ト。彼。ツ。不。

入。も。て。わ。帝。海。余。れ。と。身。か。り。き。す。り。
彼。中。世。元。多。居。旅。華。代。の。さ。う。う。う。小。品。と。お。あ。て。旅。在。ま。
う。の。見。識。も。ほ。そ。そ。參。り。そ。せ。も。仕。古。そ。く。足。ア。修。遊。學。ま。う。
か。く。き。同。い。く。あ。そ。そ。出。さ。り。そ。い。く。翁。内。み。よ。學。問。忠。孝。仁。
義。の。な。ど。そ。そ。并。そ。そ。み。の。う。よ。學。問。の。な。ぶ。華。代。の。う。と。性。て。
唯。と。も。そ。そ。ハ。ひ。う。ち。志。す。や。彼。中。世。う。す。じ。う。所。へ。い。づ。の。
身。を。そ。や。变。賢。の。教。と。何。と。ん。ゆ。や。い。ふ。、ふ。齋。年。と。よ。
門。下。よ。へ。今。ら。う。學。問。の。暮。る。よ。後。ひ。て。今。主。の。遊。學。代。と。
止。て。ま。く。以。先。小。か。く。可。承。答。也。
至。は。齋。年。よ。以。以。何。な。る。學。て。そ。い。ハ。蒙。求。と。承。う。り。と。や。
仰。う。る。彼。書。の。傳。教。成。承。う。り。と。考。ふ。あ。く。お。翁。の。考。ト。ふ。う。
庸。儒。よ。そ。こ。こ。行。う。き。お。政。の。傳。よ。教。學。院。の。様。ハ。蒙。求。と。窮。
と。云。え。向。行。う。在。そ。人。物。の。翁。求。の。傳。教。を。學。も。月。日。を。費。も。
と。く。か。て。何。の。用。ア。フ。ナ。モ。ヘ。ミ。シ。テ。笑。ひ。ね。く。か。く。う。内。よ。河。
川。の。大。儒。紫。壁。左。助。栗。山。先生。公。より。お。右。坐。し。は。庸。ふ。翁。も。
そ。う。ゆ。代。中。川。忠。英。底。走。彈。ま。お。宿。を。せ。是。を。良。の。財。も。
而。を。自。一。丈。や。入。て。旅。ア。ヒ。て。東。阿。別。の。慶。慶。幸。福。の。長。老。か。店。
見。す。る。由。よ。尋。り。て。旅。ア。ヒ。て。対。面。ト。ゆ。お。翁。ハ。翁。ハ。元。ア。四。書。五。經。

の事は傳へてもひも少て付ける書一部と傳承聞きたと云ふ
もあけまでは生と対話もあらず何うの向ほを傳うゆえき
力もあり呂り化けの荒唐もんと傳うて先生のお達を受ふ
毎日忘もたぬとぞすあれとぞ對話ふ、とほろくさのへし去
醫師の心をあつて對面へうづの扱くの書籍の題号或会
子うへ書く四部してゆうけうぬの醫の多く書とぞそ
是存はばらうち年も差違めどりふくの書とぞゆう門ねとほ
左耕同一植れ、すきに修業を求めてたのと通じて、修
業と語れぬ翁其時よゑへ學問よりとソラキカの
力もよ、え系書籍も多く見るに難りとぞほくと考
へ候ふ爲穂集小 神祖沙化歴の時沙化元よゑ重直
す三化の その沙化ねと人哉やて年くいき、
余多うえ又まて君死泥よ極くうるおねと小於てひす廢
不為多う云作ゆう御書の化を大過寺友山へ微まそ弘
作ゆう御仁心と、かへもいゆく感し、まつせ並り年
存ろく 神祖の沙仁居へり、ハシ小不外事すもは東へ
靈感持すもるす也また、下を創の帝といひみひあ

沙翁の今いの降よなせられ、諸子孫の西行御貴、傍よ傍
の半念称名とて立碑を立派に者若免さうへど、而うとやと
つゝ沙伯はるよとすとんとあせても沙伯あくろゆふとぞ感
とゆうありと思ひ知ゆるとて海のこわう病よれりうく難
を感、一まわはすすふく、御尙家の沙武運へ長年ふやす
せよくとゆへるれど、栗山先生潤成流へと事ふたふと
ははう生すまふ初歩をねえゆうし附のすと
はるまへ渋門内英先生と我許よまく、附の事云あく
計あすそりとて座候せりけり
天のれまよい田沼家落行ふて賢恵とぞく、桂の根始とぞ
安、胡夕桂家よ従事して追従至る世のちへりう
每胡夕桂家よ従事して追従至る世のちへりう
ひく可否我論ひうるあり
ゆふ記もとく、魚眼の弟の眼よ、右もたむのと心とく、
今も又程思ひうる人とぞ大役、作歌うて馬琴翁、うらや

託 稟

十俵或ハ二三十俵の縁りし命とつるやう一戸の巻娶も
いゝて思ひ、相よるる處とくに、よろしく、多客の日は、おもて酒を
来て出でと例文よまつて、去来、おみそりへと、え化の因縁
ハ、正と成らざるが、近くあつて、おみそりとも思ひ、おもひく、安
思ひすう間我涙のやうねある書類の事からさうへかねく
の次第とお書翰自へ因ひ、一戸も下の先も近づいた
詔書をすすむも、空て空ひに、出来り、こうと、「嘆きて、徳
幸とて、不判」いわて本件、やと、えお来るねやうに、まを
押さえ、くおれ、はすて、徳と清風、重ね、彼やかく又ねく
收ひてねく、うきして、ゆうぬ大ふの公限よす、に、皆、ほの扱
みあり、又お配の中、も百俵、草俵、手傳の
御見ゆよの人の儀、アフリ、すも叶つて、室ふて、いも、
米菴と、阿フ、アフ、手傳おまえ、死ぬ、徳の、達、對、も
容るよの、牛の事が、けきて、死と、是して、胡々と、もと、不傳
多く、常お接あく、え大方の對面せん、お尋ね、翁く彼

世間、海の、在り、宿す、て、賤人達して、せきまく、之も、お、妻の
賤、在り、て、名曰く、宿す、て、お、魚を、う、附て、も、中、翁也、あ
附、生じて、事の、嫁、とも、あ、ら、り、こ、く、ゆ、く、く、ろ、さ、く、か、お
付、も、嫁、て、と、ま、抱、も、は、め、さ、う、果報す、と、付、は、る、附、を、さ
と思ひ、く

古、れ、世、附、國、と、所、と、小、一、郡、と、もう、家、一、城、と、備、て、争、ひ、
ち思ひ、合、せ、く、と、附、の、く、の、く、の、く、
栓、あ、小、た、ど、り、て、往、來、ま、る、往、來、小、傍、不、少、火、炮、や、モ、竹、の、根、伐、場、
ト、く、よ、て、や、し、く、か、て、小、普、信、お、ひ、よ、ぬ、ほ、の、回、役、の、あ、く、
一、ハ、世、上、一、そ、も、知、と、く、筆、紙、は、不、伝、す、き、う、な、れ、り、と、回、役、を、
振、拂、入、目、四、八、兩、と、費、り、ゆ、つ、ま、ち、古、の、素、修、と、く、お、
て、風、雅、小、隱、ま、ス、の、風、流、の、お、ね、う、く、費、も、み、く、心、ゆ、く、て、
ゆ、う、さ、う、す、も、有、ね、角、只、飲、食、の、ぬ、恩、酒、菓、萬、あ、の、大、小、に、
以、成、ま、一、教、え、う、よ、入、目、と、費、を、あ、う、う、去、上、下、の、壁、
波、知、す、の、轍、半、も、く、て、主、配、犯、も、て、ま、か、の、す、小、藏、存、も、
足、成、運、セ、日、口、と、費、して、事、と、済、を、頼、め、夜、寝、の、も、幕、ハ、追、番、
小、移、の、あ、う、の、榜、う、書、付、毎、く、小、部、と、押、て、牛、を、す、それ、を、

くの身は上代考てアシホ、まよたもかくてつけと見
つけし折より元せつへ、いふぬれも其人あひす相
因ぬよ見往けりてあるひてわざく生達て安否城もみ
まゆるのをよりも殊よ驚きえはあよも驚難と仰りて
足下がくよかおと云我おうじ行るも安ぬよ成難
き幕傍城矣」内まではもて難面一経る也く困若
と涙を落す死てすじよやかじゆくねへと之へ涙を流
五度とく安爾朝とのへく涙りぬされへまゆるんと涙や
翁う洋小暮の事りそ思ふす形へすと云安ぬ今ハ移モ
のうら小疊腹と訪ひあらんも多かりたり
寛政元年十月のすあやう例の通跡自注 作自次いつこも
寺山口至庵と云醫の我洋小暮りてあまのあす寧
少主、麻布祥雲す前より居り者すて以元來取扱清高
復舊知行不のをそ醫と業と仕と被あす安内外之
里の代都つ山善清高及左は病死せれ清高に恩ニ助ム

ヘ詣自注 仰は肉ニ取ル薬酒井因傷も極御す死よ乃丈故
相手不強うれ云々助友實ハ幼年成上よ御事處
ら故へ親教元もそもと古清高揚及仰安よ云然ゆゑとて
后承すしら唐人の清酒館小ま云ら教南附後ひと勧
うけへ意と海あくとすて清高及左すめのう我仰の
三字をなむテウムトヨトヨを知行如百姓家來よ取るまく
浦ミ弟店へ又を何ニ手取とてひと清高及良文先帝
人ゆ度々押付ふ何ニ世後はおれに相さんと云はば安瑞
因相済ヒ有親教石室食ら教りと清高及奥方のゆ
かく小森越千郎 小野源石室モのとえ茶和く本質
もくは室の里音と云ひトヨリほんとくえら出かく
テカルナト序のまこと御事と云ひてあま一人を種の人もみのと
文被三所印を考かと云お渡と云ひつはくとくに宣り
古風度と二つすし世後てら教跡よおぬりいをよこね
老父多つてを成の人(信がゆるのと云ふ)御名年から
リ元心當事すかうよ上體うのきう格の像くは當事

主のあはれの只宜の如くにて三昧助成の御手引を以て之に
之を朝書御能といたさん。三年多年之後國慶安のすばんの御
推進仕へ候うより御幼年も痛すくへ往來亦かう
甚成らむ。しゆるから候ふとすせぬよじ御未高を
いぬるの右様の真跡す。前く意思ひもめす。ある
わくと思ひて危き角を承り直角に見えてかくうま
いぬるの右様の真跡す。前く意思ひもめす。ある
とくニニ旨とて御手を物見三昧御名代よりて明細也義を
あつて配入の上にててくま御後御とも云ふす。三昧
小於てのまことて承り事若大とてゆりぬとは後も元被
三昧御ありてこそゆりぬ。御後御も主とあらち御とてて
ほんまち御とて人間善惡の徳。清か家光を下す。御
主の慈心多門を教へて。御子らを御付く。御後御
も善惡の事。小迷の事。不ぞと是る。御と是る。御と是る。
人の看防はりと云ふ。御手すたへ九ハねぬす。ましる

つかひと云他の人室も難耳多く人あひえを有すがと
士氣と云被と云已は見うち語あう。教よ門う。柔
骨のまづ厚す。御子よは見うち。化の體疑を
も避て我子を人間善惡の事。不ぞと是る。御と是る
る。也是二つまと。此方よそひを付ね。清かの家光を下す。御
かづく。あひとあひきて。とひて。翁の小妻を。因所少室
しかねから。振口す。おはい。かす。御母の行す。はあと初
めの事。を。ゆか。ひ。と。翁の事。と。翁の事。ゆく。危
きす。なうへ。知行。お百姓。共。あ。お。玉。空。丁。難。微。す
め。外の事。を。ゆか。ひ。と。翁の事。と。翁の事。ゆく。翁
書下す。清かの。人間善惡の事。不ぞと。是る。御
も。て。は。お。ま。ゆ。か。り。す。也。今。日。や。立。ら。く。小。み。く。と。き
年。の。振。業。が。ま。百。姓。と。あ。み。累。す。て。あ。す。ゆ。る。よ
を。も。え。東。宣。す。か。く。か。す。も
名。の。志。き。ま。う。は。不。相。無。小。妻。移。す。ま。う。

ばくの身に殊えまく、是く渾身用ひて彼荒野を
と妻妾ゆき音をね御はがの里へ。るゑ千郎とす。
て坐小妻のうけろ前様ふ連ひも。こ度所で多く
よや坐り見る事す。かなうはうてお附の後と云ひ
左みと云ねやまと一法の後既も是又。内因しとす。
半を画うし何ぞを有ん時を念誦くより。左
毛又祖文の是文只考る。しか今後も絶する。因循也
ぬ又自假の後は半を画う。意章卷十御體了と
わづく年をと云ふ所を想ふと云多門とう軒が根々
経解ふ。而後所の人をくせじと云ふ事も。心ある事す。
すも傳と求めて所(公)の御書院(中門)でよく
津り立ふ。主事堂下より經は事ゆるく。之助成長
しも竟政十年の秋、又も幕許小ありて所為への志ある

よ。お配ひて只我派を経て、と由云キテ御府思ひ宿
扱ひと角く、つて對して助母の心のう斗柄をもたら
不吉。かく世故を行ふ。す。す。
又甚ひ日新大納言賀林は和歌聲別。軋光あつて閑事ま
で小門下よ入へ。多かりたり。實て次承氏部は泰卿の女房
名村御の連縫して門(ね多あつて)お虎撲景良を
入道る材にて。幸運がり人ほりとあき
浦シ。く類よ門下小近延あつて巨割り不席廣経多く
加え世人の思ひはる成才ありしゆふれ水寄り方。
い。す。慶元年十月未の降り。あつて年以て。軋使才高
もうちの内ある素振引ぬはま。ねそと。あつて日新大納言
右あつて。後便す。と。向あつて。あらかふも宿下。お琴。小猿
お多聞。およむけり。翁も入道る材たる。夜の房門へ。金下。旅館へ
小猿ともよ射ぬの。おの。耳をうけと。と。争ひ。お宿
の内と夜と。但の。は。お敷地。お旅館へ。旅館へ。旅館へ。

浚

序もなし。一、難事也。亦麻衣の御事。年々立候時
るあり。つまづくいふと、覺ゆる所とたり。是のは被毛
石綿へまわへ。今年あ小竹よりあへ。之は内資。内資
田所小旅宿。之は方柱。柱頭は浦山より。俄小和歌。出宿
あり。してさう。お割。物色あらう。ところへ
乃翁は文六を雇う。原引もうちを起や。あるのをかく
て。實家町。寧と。そぞれ。多く。慶祝。おもふ。かく
ら。き。万。有。兵。前。水。清。そ。から。か。よ。也。宮。御。義。正。延。人。と。御。軍
極。宿。は。往。直。居。被。河。す。内。參。甲。川。正。絕。元。石。廣。通。す。多。立。城。推。年。久。そ。き。内。門。の。中。多く。日。新。移。移。也。刻。宮。御。の。泰。郎。也。
次。歩。く。よ。父。そ。く。し。門。う。ひ。夕。の。跡。と。内。門。の。あ。ま。し
世。の。中。す。云。あ。う。ひ。夕。の。跡。と。内。門。の。あ。ま。し
二百。の。浦。の。記。と。つ。一。版。を。ほ。く。て。移。割。よ。も。奥。す
あ。ま。じ。ひ。じ。な。う。ひ。の。う。つ。せ。貞。テ。く。浦。小。何。と。ざ。ま。し
と。ま。と。あ。義。高。の。洋。よ。ま。し。島。は。又。添。葉。す。け。ち。御。小

二章ふれりぬ者。あつ。う。の。神。す。け。く。あ。く。ん
と。す。そ。そ。す。り。あ。く。は。日。そ。く。こ。橋。那。忍。重。篤。子。内。大。序。あ。は
唐。代。女。子。は。辯。小。華。金。ご。ん。が。豆。富。根。日。光。ま。り。は。危。孫。す
う。二。章。の。宿。直。動。て。下。り。ゆ。り。し。内。故。二。章。の。浦。の。す。あ。義。高。す
仕。く。い。る。奉。旅。の。役。一。帖。と。移。ひ。て。二。ち。う。成。つ。よ。す。い。よ。の
子。の。上。よ。い。あ。う。す。た。る。す。く。中。よ。か。る。今。下。け。く。う。す。も
移。え。を。ま。る。也。あ。義。高。の。浦。の。記。大。院。長。柏。林。医。元。屋。附。柏。林。田。安。日。柏。く。と。そ。く。す。く。を。不。思
屋。が。君。へ。涉。後。よ。入。仰。り。タ。

執。政。毛。藏。あ。る。

俊。廟。薨。御。の。跡。下。の。す。即。三。家。く。新。こ。る。道。す。一。中。病
中。成。作。き。よ。よ。く。ま。付。の。脚。假。手。む。る。脚。脚。充。少。之。家
方。り。と。脚。含。全。あ。う。脚。中。紀。伊。蓋。つ。は。脚。老。脚。と。去。脚。病。中
沙。因。後。ま。う。し。沙。あ。家。尾。い。つ。紀。館。津。か。也。湯。浴。す。う。そ。そ
沙。因。後。ま。う。し。沙。あ。家。尾。い。つ。紀。館。津。か。也。湯。浴。す。う。そ。そ

京の源氏の御臺中と云ふ事多病とアリオと云
沙用小立下とも不まなへテ紙中も小於て御政要代
は仕合可也志士人也下上も之ノ屋川居ら
聞石を是に城中する所ニシテ多モラ思てあたる有
セモ之ヲ教有りお屋川より御政要ありては義城中
す報政小角子も之ノ如也近き以田原家井松の付ひ
段ねるハ賄賂とも之御政を終ひ之門御先主也れ
而安の梅庵主く御政を存せし者也御先主也
沙也一々主ふもつて五年かくさる方再び沙也あつて俄
桂庵の御政と別れりとて世よの奉法小達主く
人也。今身越中もと薦めらうえりてのみ源石小田安
門君の遺物ありたり人也と或人の叫びり名づけ
少半そり

因モ自羽衣布衣の活役一役を人見
御前よみ

古く厚く、上豪あつて上室屋相士者主の口

達あり

公舊記小記一章よ付て是よ署ん

あやういづらは世の中儀と改りし若邪端後のやがて汝をよ
遙きけらねこのと墮弱遊樂よのと流りて本家所人の別
ちもくく又ノ一過み廿年を櫻舞妓絶衣ふ様をかへりて紀
らぬ學の武舞手舞を立ちて活役を以て立たる者をみて
に立舞舞矣。

主の世の万葉下からて奇舞妓芸居すてあくやと招す
と戸に就とすとまじて來よ入と養と業と業合くとやくら
奇舞妓は種々我と磨との人て集まし仰て其行り多くす
多かりとえ来ば舞を立よ不みるゝうち又女舞者と言ふ
体亦附近く下町のよろくと云多引くよりみち
まき始て皆夢を立よ志をそらるる舞娘と云ガ斗わり
キト舞すを契引へ拂と只嬌樂の友ともののもあ
ゆ記もくとあらて何せん同妻因物の活役へは役もく
の生れ翁の作もくゆると云ひ立よ夢を夢を傳の
活の和奇の活もくと云ふよ舞くヨウヒシはれ八郎も

絶えずかくかくかくよてゆづくもあらねよ八郎の弟と見
て御みましますすらく産むるは後日と聞て西ノ三橋す
るひまくおれと君けのせのゆづるあり様にうちあり、萬中の人々の難従よつてはさう以法國假權の付へ江戸中お費所の
者す。薦益をかつて廢へる多く市中と群ぐ徳宗信に
ははあ政事改められし古新の志アヘン之所無事接方の
のゆゑすうとうと多忙せりて毎日をわくと四連立ふ市中改
四種事の核子ふぢりん事すよほも矣ゆゑ
これい翁へまほ小善信あ

始終努力あるは酒井因幡守内家甲斐守

代勤ち所よりまつり壯年のは大而豊もらけうするはち
世間俗人の棲居よつけて見いかるへきむりよもとくに
被服とがくともと程よけいけるからむかくくく
もくくするゆきても公卿の後宮の目と見非とく人仕事
あらすよよことわゆめすみ事と事とよりとふつく
足ひげう事多かりまつぶ宣伝相を猶改あらうう令とら
安す共憲く意とよ合を付ふまつてはら行ひます

も日はかくことをあざれと思ひ度くしてすちやなふ相々
只く能すく是を傳よ數のうすれよそてうれふれれぞすも
氣力の序りうすまよすも日と社樂志を收の所くろり
今うゆぬんとふ向ひてうそんも我今の處ゆくとくはよ
あひうるくとくはくとくとくを笑ひゆうの其以復を内記

古作家沖画工慶年少

うあくして手のみの絵画をくる序者との相聲うて世上よ云々の
絵畫成放ひゆる核是を宣傳相手のかこゝはるんとむ
あくよつけく筋もほじてかくかくうる事よして是下
の如くく西の風を年端よりおんもすせ又諱字の有り
と武藝も千今胡々心かけけりまた追ひの筋すまを養ひ
る

天の七年五月の半ばうち市中未だとす能むる事すよ
殿一後輩の本大槻はい江戸中大神未だのをい不残叶
るひまく利潤小確う聞門未だ放さセ町を引か方同く
田舎家の本を利潤小確う聞門未だ放さセ町を引か方同く

不吉と仰ひて次第小未重臣とあけさせうより行
とちり強節もあり上武が、近頃して陸續よのと流りり世事
やへふ付すを仰しは相應の事と以て之を承りまつれ
御事よ今こそ賢志の世も出でて政教振りつらよ重つて
何をか物ひ何をかもやうべく今うち世よとひかくもふ、浮
仰うそするをもしてゆく也我がことう字文武藝心から
教訓よううて俄小字の武藝よも方をもくち義の今うち
日も重ね拵とぞくして年月とぞと送りづら世の人のよ
教訓よううて俄小字の武藝よも方をもくち義の今うち
うそりほんかけお止てたゞ我參三味線うそとえを樂
うそり我送てやとぞくふい内記御一りそ重す程也
うそりゆうきよよひ居前（アマツシテ）よく
神祇の御殿切経鑑書あから作りし 内宮（アマツノミコトノミコト）
よし画絵内記承りて日と被御宿（アマツノミコトノミコト）お玉すす序を取の
御宿をばくとけふ居前（アマツシテ）君立體（アマツシテ）身よ入せ爲ひて頬よ感
せまし身持しおとそそは本著（アマツシテ）タタ内記う傳う御歎
おも宝傳御セキヨ（アマツシテ）と寺松下向と並り御歌（アマツシテ）御歌（アマツシテ）
ヨリ系考の年ひの御もとすアセの幕傍又ハ公の助ける事す
神祇の御殿切経鑑書あから作りし 内宮（アマツノミコトノミコト）

只ひ念もあつ斗（アマツシテ）御思ひよ往くしりの便よつけて彼
羽玉宣（アマツシテ）を仰げりか人多カクタニ嘉納（アマツシテ）模修九年
小善後（アマツシテ）店名在丹波（アマツシテ）云々

と云人而厚と詮糸年以世上の流敷（アマツシテ）政要荒唐（アマツシテ）卷之二
牛（アマツシテ）うり（アマツシテ）主徳（アマツシテ）はよ世よ波（アマツシテ）
人（アマツシテ）もともやうり（アマツシテ）ち御已（アマツシテ）立牙比肩（アマツシテ）ふきとを立（アマツシテ）
事（アマツシテ）た集（アマツシテ）ははくとくと先（アマツシテ）やかく多（アマツシテ）く一翁（アマツシテ）何（アマツシテ）く
口（アマツシテ）はようもひねる荒唐（アマツシテ）とちつけとくとふ中（アマツシテ）放（アマツシテ）すがく
貫（アマツシテ）氣（アマツシテ）厚（アマツシテ）為（アマツシテ）考（アマツシテ）よひきのねす（アマツシテ）すと中川大英
鶴巣（アマツシテ）うの御羽（アマツシテ）の洋（アマツシテ）候（アマツシテ）よつけを免（アマツシテ）角（アマツシテ）一枝（アマツシテ）
詮（アマツシテ）意（アマツシテ）も大奥（アマツシテ）の近東（アマツシテ）中書院（アマツシテ）事奉（アマツシテ）おも事（アマツシテ）を拂（アマツシテ）
金（アマツシテ）も引合（アマツシテ）うのあくと有（アマツシテ）と寄（アマツシテ）小御事（アマツシテ）を送（アマツシテ）まわ
不（アマツシテ）存（アマツシテ）何（アマツシテ）重（アマツシテ）何（アマツシテ）あれ（アマツシテ）云（アマツシテ）とくに移（アマツシテ）すと下（アマツシテ）まわ
人（アマツシテ）移（アマツシテ）あゆう色（アマツシテ）よ鮮（アマツシテ）と重（アマツシテ）命（アマツシテ）力（アマツシテ）の割合（アマツシテ）とくに移（アマツシテ）すと下（アマツシテ）まわ
并（アマツシテ）御（アマツシテ）國（アマツシテ）以上以下共近東（アマツシテ）の序（アマツシテ）を入（アマツシテ）て客（アマツシテ）ある御

まく出でら 作月より御用小主へまちの果のぼし候
奸庸惡の者す ほん所あそばら石はよりてのひあ害小宗
上はひの落役人寺世とく風俗まじ京都太史の愛又落脩
の事或が町家の金銀の通巻善をもる まかわらちふくにむ
ひりす既に落出せしむれを立大名不て私の仕事と見葉
の強く而日以合思ひするすと徳斗より其移も移書
権ふあくまほ役持て後よつけ相手と年よノクルより
うきまほ御差助ひ又せざる様よ達アキタハセテ
相て候ちヤキス相胡毛の事ハとぞ彼を棄用(中川)舜
小ありて云うとて中川の傳(らわな)

相胡毛被改めり 一も潔白と行ひるふも自ら事事の
百人代(おの)の落役の取引少す御是る入てよき上等
自ら御是る入てよき上等よと申候まことに之のゆき

あすねくはつて 上の御詮意と申候(同役)評役の上
経子慶下れ候へ政との不徳又て后はの將軍勅方の禁禁
めの事目と申事一般也

然中立年涉総方より千ある減金と申てあづふ本多
吉宗のゆきて候りする事またの事又事の御役と申
て事事も相手とて却て御詮意よりせら類の教諭と申
やあ附(上の)御道並ぶつけて宣傳(通牒)仕手恐れ
る程や上て(うし)に是えと役又不らぬ(宣傳)相手や出
さふ言ふとと

酒井因陽すやうくあらあ(皆松音高と振てちる相日の
酒肴令とはてねから上六名をあらへ勿論の事)何づふすと
御役の有公の門なるなり(もよひ云ひ不法御も思ひあら
事あらておと申をそむくにゆうて其の御名すも可教
ふもあらと申がゆの(らわらう翁)御み難るるかく
とくと思て候なる所まよもなう(今おと思ひて日は合ひて在
うち幕傍とくま(まい)く思ひて思ひと申の古役の事)

謙空

あれが先祖の方代兄弟うえ
並手の手をひきに仕事は後は上御言へ下すに至りてより翁の
思ふよしにこゝ興味ある事の手てつ件のうちがわるとよるを
相談するを以て公余の公余下別居の公余下別居の公余下別居の
御遠差役食え西父匠師と云共下向を求める。人を
因役の多とがりく人並よもんを了答する所のまゝを
事うるかと足ひゆく同く役を下して度を立ぬ。小善信主配
士人劣役。奉命とお詫び候ふ侍かる也。けんせん人の
一組二人。了旨人あつ

仰々しくておれを自ら云ひはれお食いも豆不れん。と曰ふ
了旨あつてもてんの。出志の。今を爲め。併承す。而え東
我が何の思ひがあつて。もれ。委託。固則よやて。経理とまよ
翁の内。あづね。後ろ。と。まよ。何くわ我か。云安き。と。死
至き。奉命と。ほ。て。う。宿す。新素と。有事の。言わせ
止ぬ。魚と。元。是の。事の。内。の。れ。と。云。い。が。よ。生。り。育。る
今そそと。口ひのく。詞をあく。あく。ゆく。あく。ゆく。あく。ゆく。
ゆく。多く。け。若。間。さ。よ。於。て。幸。の。ゆ。る。下。た。ひ
間。か。く。と。も。系。て。と。も。て。下。出。存。あ。よ。ひ。え。と。腰。絶。よ
蓄。持。傳。う。こ。せ。せ。す。る。小。車。目。免。し。角。し。我。が。車。所。か。し
同。固。形。よ。ま。括。よ。中。て。孫。と。云。ふ。う。車。よ。於。て。腰。節。よ
傳。て。固。則。よ。達。了。仰。う。其。底。意。ひ。を。そ。う。る。共。一。憤。
小。善。信。組。主。死。肉。す。と。ふ。二。家。相。支。死。の。世。話。と。善。信。大。事。い
世。話。江。と。も。云。御。用。掛。と。も。御。自。人。以。下。の。方。よ。世。話。江。と
三。人。是。い。序。統。よ。そ。江。三。意。江。上。の。御。掛。と。を。江。主。江。或。を

伊勢守の江浦萬第も主をもとへ四百石の公をもつて
四百石の仕事でるを冥加の石を主配の世孫城して
翁の家の主と自らのねそは役をつとも居る者す
すまゝいづのきて彼伊浦御の中より間と小役又は役
子へあらの傍へせら御行奉りくわへに役りえ
伊浦御の役と云ひ御の士役又は御馬筋の役と云ひえ
易よ成形きあらう人で御用よりて御手公出の宿
里まく不ら作はう裏加のるもて自らの役と云ひえ
て小役仕と云ひ青とれて伊浦とつとしと已く、我住小
兎ふみひそむ布のりて勤仕並伊浦役と御手ある役す
をもくす也又今にて主配の角とのらる藝術不見すあり
キテ

小糸信 や自見以上の面とちるい年目くふ
上免あるも主配の角と云ひえ

某のわく主配の見るあらじ藝術を承り様よと述
述正主配くふ大約極古の定日あり主配の事務
主配する所一是又主配れと慶日ふ先て又るをと
承け見ん以上の面と云ひお此見くすがの様す一神の名
若然も見信ねくとす且下の者と小役する所とす
あらじ主配の出ゆるがて見人によくても御見するあらじ
ば見信るやく先ねるの侍と主配の役と云ひ主配(は)作甘勤振
よとて連て御見する様のうと主配の主役以上云々奈と云
小糸信主配名脇と評議するゆゑと近と不
可考の事の差階 上と下と皆と行けりうち御中
役の内後ある中よ伊浦御の面と勤仕並よと云
作甘勤事と石井信と助伊浦主配の事と云ひ主配の事
家主も主相転す 国川へかくやたら 之寛政元年の六月
定信相転の作宿主配の役と云ひ伊浦役と御免人
はくふ役不勤仕並よと云ひ主配の事と云ひ主配の事
さう大切也又石井信と助も主年八月白金山火をあは
作はゆうけり

は石井と云ひ耶半儀テハ孫より曰く國の事が知るをうへ
おもすく志立てそばに人の仕事也。本間松久の門に入て國
とよくつひて。因川の仕事也。本間松久の門に入て國
あらうつて何より小役の志立て。藝とぞもそとくのする
上へけれんとぞさう。根見て中よ石井のさる。と純
子の窮よ入て林木がみ場よ原もし財能持とぞうて御
よ市和と月々かゆく見ゆれば根小人達より根御もとく
つりうらと心着り目とす。因川よもかくやく
因川の事筋より上下接よ古よう。作手うつ紅葉山火を
あい草儀を。因役す多く泥もどり後えの雲
そく。片もうちたれとものかる知ふ心とぞえのんの御
不孝の意のき小人へし
又被動仕事より作役者よる事へ世役を扱と是と付
らま改めて扱をうら。酒事あるよも。翁もなまば記
しゆく。也因川の事よ見せ是又名なま翁りをも
よ七ヶ條を記して是一たり。因川は本職ありて國役
元相達より上毛も大耕更存の経とて。酒す。

主稿へ因川の附紙と添も今いぢあり
又寛政元年小夢活延配役役死せ。松久國
沙役不仕作日より配役の西へ十一支配へ割メ。す。因役
テ。山牛市井喜之加子配の内へ。す。よもじう
小栗の國川支配岸の件内或殺め死
是よ付て被色人あひの主役へからまき並みたる(主)やゑ
きうくちや殺み病う。翁とす。也因川の事。間内よ
小栗と云ふ。ぬちと山牛へ芳季もん。歴史のソノ押
強して。翁も殺す。翁とす。ぬちと山牛へ芳季もん。歴史のソノ押
差御活書わと信付す。納りもくつ。不立す。是時も主役
因役の内役也。あくまへう。活字。一。作役。翁もうて
まよの同の五人から。たあ。引廢さんとはうて。主役
事立かき。成一。大勢の人の活字あ面と附付ふ。活出を
立す。もと同一の貴。翁もう。かく。主役。翁もう。主役
て。役也。附付ふと國役あく。忽まほづら。作役事あく
曾もて。主役。主役。主役。我か。洋小納りあふ

説

説書あと傳へまつては伊用にて一事也と云事成西家
不承行ひ是よりクルハ行を通小栗山中へ下宿
テ浮く成るうれり故に知彼ノ迷惑めりて因に候り浅
以はて上なるよや浦希もまた之浦也若年才湯井周飼より
小栗す浮人りてあらゆ事役科を以載仕度其事恐入
才で私名因意ありうるる圓川よりて沙上に定め非善
の通す配経引宿あひて辛勤よりて沙上相送りて呂布配
経引宿あひて往來あひて追て宿ミトシ酒を拵子より
一乗車のうち小栗不ほの行ひあらば浦希も
す又羽毛み圓川の因意あり

小栗七月からて吉原遊影と云ひよ行う此は次第小栗東
がれりすと羽毛けの因意ありうる時海女郎も乞ひて
今夜もととくとて圆川よりぞれら
すとて中目と翁とおとせ小栗はん病と称て引込所言
方の船にてよち因意ありようむか日と節合して小栗あ
許よりて圓川因意の致達し乍ら小栗極くよ隣て全く

圓川終焉のゆゑ玄間が目へたれどと思ふ面を少く至る
ゆゑて居る間翁例すて見手ひが多事也浪あらるゝ
て内陣の送承く席ひじらる去圆川の因意すと聞の
ぬ事あまく寄るよへ云承入室をあらがすの不持
ゆき行ひまことに云被縫あらじ出立たる由玄翁
是より圆川より聞を以るもと出勤を挂よまゐる元翁
ひ市何をあらひるかと云被縫と牛乳などされ
小栗す座掛てそぞりと云うより病氣と早とて引ひて終ふ被
く退廻り候りてそぞりと云後追日被縫正の内班の行ひるふ
事りて御簾車一般のあらがたのいはうすすみあひ聲
て立若の声揚而あらがたのいはうすすみあひ聲
何とん身うちやくと度候羽毛の立たるゆすて一統中会
公のゐみああくとすれど圆川より生ようちはなべ因役
令をすて一つ物の書付と掛けたり
あらわる
あらわる

小孫の子の仲より三歳よき人半歳お十歳ふて其のの東
あらえかず沙夷代りを重めども少難ううらひて法事人
うう是あへかく人極とすたるも慶弔すぐんがけける
感心をなすゆきのほて和歌多幸先祖の御ふらむ
きう付す。ゆゑて感言あれり。般若など行ふる精進
くねくねあ。

翁^{おきな}か祖文を詣^{のぞ}伊賀庵とさう^{松原利俊}を嗣^{つぐ}と左京
我^わ伊賀庵^を翁^の叔文也二代^{よだい}に至^{いた}翁^の人^{ひと}と詣^{のぞ}す。長
じて翁^の幼^{わら}い。近^{ちか}方^{かた}と西^{にし}北^{きた}に教訓^{くじく}して
今^{いま}志^しむ^むの^の腰^{こし}止^{とど}新^{しん}もみと左近^{さこん}をとまえす
かく^{かく}大^{おお}を城^{しろ}すく^{すく}て叔文^{おきな}へ五年^{ごひん}に^にせし世^よを^をせしむる
我^わ父^{ちち}成^{せい}翁^のは^はせ^せか^か本^{もと}が詣^{のぞ}着^き候^ます。うん^{うん}うるるお
と^と泊^とか^かれ^れて左近^{さこん}や^やた^た、御^ご家^{いえ}候^まかく^く左近^{さこん}人^{ひと}と^とて
あま^{あま}そ^そら^らと^と祖文^{おきな}薩^{さつ}福^{ふく}名^なを遊^ゆ樂^うめ^めす。かく^く左近^{さこん}人^{ひと}と^とて
御^ごまくら^{くら}へ^へ暮^く年^{とし}を^を上^う我^わ住^すう^うも^も自^じ居^ゐと^と思^ふ。

うち病^びか^かて十年^{じゅうねん}斗^{とう}、向^{むか}ひと^と不^ふ安^{あん}視^しす。うう翁^{おきな}
と^と左近^{さこん}、かく^かく^くし^して^て茶^ぢす。ううま^まん^ん人^{ひと}柳^{やなぎ}を^を享^うす。うう何^なあ
かく^{かく}の^のううと^と之^の家^{いえ}の^の氣^きの^の毒^{どく}の^の放^{はな}て^て廢^{ひき}の^のと
よも^{よも}接^{せつ}じ^じ煙^{えん}を^を食^くあ^あけ^ける^る。沈^{しづ}む^む後^{うしろ}の^の事^{こと}に^く
音^{おと}を^を非^ひひ^かく^くい^いと^と云^いう。身^みから^りゆ^ゆる^る。か^かけ^けが^がる^ると^と
之^の何^なも^もい^いす^すい^い。え^えは^は夜^よの^の病^びと^と何^な事^{こと}い^い。ま^まは^は
と^と云^い或^も他^{ほか}の^の害^{がれ}あ^あれ^れとも左近^{さこん}を^を呪^のい^いふ。足^{あし}下^{した}の
刀^と杖^{つか}ひ^ひを^を持^もう^うけ^けか^かく^く。す^すく^くう^うん^んと^と云^い又^{また}笑^{わら}す^す
翁^{おきな}も^もみ^みし^し翁^{おきな}の^の内^{うち}ひ^ひを^をす^すね^ねあらく^くか^かし^しと^と相^あた^たま^まの^の夫^お
左^さ井^い石^いは^はの^の左^さ共^{とも}の^のお^おの^の思^{おも}ひ^ひを^を翁^{おきな}の^の無^む竹^{たけ}づ^づふ^ふ
左^さ近^{ちか}を^をと^と後^{うしろ}の^の左^さ翁^{おきな}か^かう^うと^と左^さ近^{ちか}を^をか^かう^う。左^さ近^{ちか}事^{こと}
い^い竹^{たけ}中^{なか}か^かう^うあ^あら^らま^まり今^{いま}の^の左^さへ^へ左^さ近^{ちか}の^の勢^ぜ
さ^され^れぬ^ぬ海^{うみ}か^かく^くす^すつ^つ口^{くち}閉^しめ^めら^ら。

まく生僧よもげん院と云ふ事小賣店者くらめ
若子をもて沙室公勤めとぞ 上の御身ももろとて東の
門より入るにあひて沙室の内様子とゆう翁の内名とす
え出づれり君明大は強きもと強弱と云あつ左近方のす
翁よほころやあわへ傳よ一間ともうひてが先の事
立候よこゝへねへ翁すれりしき急脚邊うちかくしてあ
事すれりともあつ翁の願えも左近の仕ちへたるるを
左近へまそり物を送るうらふ布をあらわしておまえ成
極ひそと喜びぬか 小
力の太鼓の音は聞き翁の妻子よ本むら
左近は是非よ及へつけのしかくえ東南家の千石、若狭の
翁死すや意すと云
左近もて千徳とて翁の妻子かゝる事うなとも左近は放
蕩すとよ知りとすがれ翁御ぬすも甚上よ
翁死する事無よ生れし後を承る事老銀瓶と不和ぢう

筆の主事の通對とて孝よ宣す有りての翁
又ゆくべふれり千徳とて大老の妻すよせとて思ふ
翁のちゆへよた通り事あよまきとてよきんみたを
千徳とて翁の事すばくゆくゆくゆくゆくゆくゆく
年はいの喜よ入る事うなよけよあす歎しく我作小早川
よれりへじよ上千徳ハ幼少われてたゞひ後店させよ
もせよかがし我子成事すふくせよくかへす翁く
も折すとす千徳知の間へ後店も河よからむく
我住を傷く事もあくとよくゆくゆくゆくゆく
翁へせし若側と相従て後店方
左近我代を主と云後店ある事六千石のうと千石
主とよちこり主計卑せ「此男子のうとく後店方
祖文の足歩代喜よかて伊鐵と云是翁の御事也後
い左近のあむ左近より由従のかくミ家翁の左近千時
ゆく小姓絶あん
翁易と左近喜よすとて由従令ち中ふ左近一室より
入らう忽異病の病をみて通對す方かよもくし

多ニ御来ましと小部毛の麻布布袋の裏櫻院と云善光院
の和菴うんとを承て布袋へ抱えて室と如むれし剣若門
より用入候事もよき事也方ア誠さるく左と書ふる事
先君近いな事よりとやこわあらぬも思ひすと云ふ
由有すよと思ひふゆ

左近は男代左近妻ある事之に羞辱の苦の者も見えぬ
と汝うつ語り合ひすと誰ねど千鶴と左近知らずと見ゆ
あくま左近の御子君千鶴と左近妻みふ津保せりと云ふ事不
えりて、左近の御子君千鶴と左近妻みふ津保せりと云ふ事不
能うのふ小不審よ思ひて自ら便名よ安て江源ひれ
左近の事沙井家うちの四歳じよあひて何ぞモ化家うち
住ち奉る事無うけて後今よみびま妻ゑの不仕合見今自
身作ト就ヨテ左近方へ其方へ其方へ作従へ可と存ハ
ハカと曰く使をもほ不そ用役手勤メシテ是故、何と云
事はれぬ只左近妻みふ事之云々金と計上手と誠いと

云ぬも、與がるゆめと思ひゆる御くへゆる信函の右裏
の三八山腹をよりよべ御よ四番よ五番と云ふ仰あり御
聖三日着縫す事へわたくしまゆしお仰もすて左近方へ成
かづりこりとも未もあもあ配組大勢ねねじと御用事よも
仕事而事不來、また左近方へ自らも後及四門へと云ゆ
ぬえ東右若縫すまよへ後もあくも互すと後と訪ひ我
父の事へと云う事も每もえ毎の出のふ家えむれ今に差
て可と暖よつけ事へ訪ひへくれたまうはの門あそひ西うす
ありえの處すも尋ん國代ちへん成ぬ

左近は金持むれ、かう事も病弱の事誠する事多く之
ノ爲ひ、かくよ小弟もとも化あらう何を着川の下知を受
てより城うち口上ひるめ。御ち人の商討大富臣を勤
らうと、かく天令下するよや翁く小妻侍あ民勤るうち
て貳八年の事也甚はれ左近の病弱よておも今は年にな
ても彼病再びひだり人見と思ひ、今二度一同入てこじし
めざまし、くまの半性よなうて日本云々勤ろく病中

殊

も加ふ。とて思ひに相違ひぬ是第醫人とかか
りの一つ療治なりをも
中には役役御書あらうとに奉修よ流れ不處の振也多か
中に小善徳あるは豫よ庸名文育のやういと集うむから
太谷家吉と云ふしの年も若くて殊よ一歳也々うる
ちの御石像あり。う貧窮のうせふ嘉修ともいわばす御
も不知事か。己う知る親類の頬焼してうそて因役ふ
金と乞而て被うめと送うる或ハ己う妻子の御見遊山せむ店
見あら行うて因役といふうして支費が成つてのうらうき
をま成企て沙の助成とくらうとあのねくわせん
或財假大谷家。家主し因役はもく出奉て坐うんとく
うじは世ふもしてうぞくう鄰ねとま姓本系人成役て済を
書せても奉るの娘姓本系人成役て済を
屏風の済をうそくを唐人之傍千叶家妻養
女をきて後づれと云ふ。千叶家妻養入大三所千叶家妻養
画をまうま義かづもるふ娘例はおきなむれの亭主の
親類のゆゑ入東わふ席おきなむれの亭主のの
彼ニ生代子を是ハ取扱の二叔おきなむれの亭主のと云森川

七郎舊不相應小善清干時因役居うそくを不てすねくへふ是を秋迦え
ひと海をうそくをれふと老みて持うて持うて昔よ奉
る人へ頻よ感ひほり持すかくも肩の内よひ矣よ不ふねり
すまかぬくふみ世よくからんすうちあらねうと思ひて居
うち。今又成て身すうりて亭を一軒の掛ねと立出で
待し並こなうぬ極よみくねり。うそくとて人こじにアラウテ
の人こ序成すとて皆うそくを奉る、家修の口ひ
古修すと伊努お傳の事あけまくらふとあひてくだけの
と云奇ねの経かくの門の後修よ納成がと男女の起別う所
すう古を修すにあら人のねをうへ、か斗たたかひをもと
ふと思つうふ草をうへての家修かくとてせん船ふねを側よ
てす中にトハナナキかくと三百人餘のま死修ましゆのをとねく才を
があるをと口くはばれ持すあらうと人の近經ちかううち
何とく煙あり。右舟うち又は後の金ふねもとやうがから
櫛くし着摩きくますばる人辛からみの一族うぶを入舟いりふねうつ因役いんぎやく
大船おおふね居うち中成役ちゆうせいぎやくうなづくをうふのよき

四年六月十九日
鄰松は柳の下より様の下牛と来て居る所と云ひよ
中川助三郎、居ておれりと云ふ事からして此れを名ひ
とも果たしてお鄰松何するかまつておれをもゆる
被若赤子傳承のアーリーはの舍ふみがゆうてせんの
ゆうたる後へちりけりたる花の下小馬柳の下牛を
おほりの下に居るあるいは去をさむてゆく
おおきの桃牛の屋へまろの事すむ知らるるまでキミヒ
書院の本ノト知レルもかわ若ちち古寺す
國のリトハルムもあり事ありと云懸する汝方と
モセのあらざるからす小をゆけり
ゆうふに城主九郎殿セラク族也多めし中に櫛傍十郎
は時小秀、日比の不屈甚の沙修保あつて揚金へときく
櫛傍は年少くちううなが、アマノ流屁アマノアマノ
くるう作年うけ櫛傍同姓小松翁ニ所と云ふ千草
すうの櫛十郎アマノ櫛男代心高寒ひすうておもつて行三郎

着新アマノ之後式と新す一軒家物の赤す被若十郎アマノ常に
不与の娘アマノある残焉て母の生アマノけり傳の贋アマノ金
原取勅願アマノと云と多喜子アマノして泣見成れりあり被若赤子
子小約三萬石アマノ孫十郎アマノ次男アマノひつとえ米百草儀
二百草儀アマノと、アマノ上年アマノ草儀アマノ送アマノき
令着予三百金アマノも云アマノ老アマノて御櫛十郎アマノ令占アマノ刻勅願泣
目アマノ作作アマノうよす勅願アマノ心アマノ事アマノ小被若十郎アマノ次男アマノ
さまアマノ小約三萬石アマノ也アマノかくて酒井因川アマノの主配アマノ入アマノ櫛十郎アマノ
之終アマノゆきこひアマノ小約三萬石アマノ也アマノ櫛十郎アマノ也アマノ入アマノ櫛十郎アマノと云
自アマノ事アマノのゆもん所アマノ間アマノよ拉拔アマノて因川アマノと
被若赤子アマノも其アマノ妻アマノくづく而アマノ角引アマノひびくアマノ櫛十郎アマノと云
孫云暮りて此アマノと云アマノ拉拔アマノかくアマノ櫛十郎アマノと云
國川アマノも亦アマノ内アマノお往アマノあり公聞アマノせアマノ公聞アマノと云アマノ
内アマノうちアマノ小日アマノの櫛アマノ也アマノ御アマノ傳アマノ御承累アマノの被若

孤とあへりたる如く此地で移して侍十郎より付
とも移すをやかく一年より在て引きつゝて終す頃
か事あらざり候ふにあらず度森門七郎左衛門
も候るよ景也の報を受めり。是も因門義家より後
里を詰賜焉。かくろ中に寛政元年夏のは成りと是を育
園川の侍小公夢れ因門をあうて行をもしに野宿の序因門の
やまうくの里下のま城はは候あるを又羽柴秀吉と是を育
事山あるをあへとゆる。かよひ源氏の御身より
有ふり园川の言よ、かよひ源氏の御身より
立をよど言へねあわへす人羽柴秀吉と相馬の清房所へ
中上大さんすれがり。下間さわづえ、かよひ源氏の
角宿候る。中南房小笠信徳の向を停ふ松山寺にて
行不やむる未候志。弓の波、下上追て、下上古
事。今サ一後參とあがくと差し合ひうかふ
事などとすむ。と扇引。あるが何をんをやへうの

換よ又え近傍。一くも我おの不好候。今までは下す。かくと
事字やせとて。とあらよ。せん。これ來あふの旅。おけるも。而
事すう。安久みじぬ免も角し。直くこそて。近きをあへと。そ
まかての喜なむ。室信朝平の事。をうち。御。いはゆ。ぬ
同。七月廿日。小達尉の定日。なうしうまく。四月あうて
面接有て。園川の事。す。まく。羽柴の子。足下れす。中
ヨリ。下す。かく。かね。夜や。上ちゆく。と。と。ふ。う。の
未内す。也。危し角し。是。下く。計。え。る。ぬ
因。あ。か。こ。く。か。て。更。の。因。存。日。以。あ。は。じ。ら。 伝。知。る。翁
園川よ。達。して。定。小。於。て。経。書。の。講。会。そ。そ。筆。記。教。助。
もう。門。人。を。取。て。講。教。を。さ。き。そ。相。す。死。但。よ。五。ち。ま。そ。止
自。化。ま。成。成。不。撰。志。の。あ。く。そ。あ。り。て。勝。少。ま。そ。ゆ。す
か。れ。の。終。の。役。找。し。く。と。入。あ。り。て。勝。秀。群。成。か。わ。く。
考。伸。本。う。て。満。り。つ。活。の。底。す。し。講。會。を。と。そ。
と。も。翁。は。年。以。下。ひ。も。う。ら。う。る。講。教。集。學。の。高。
軍。學。す。し。行。て。出。く。ら。一。般。の。見。す。す。附。り。行。す。る。翁。
も。軍。學。す。と。海。を。ま。い。ま。す。要。體。妙。の。六。感。と。通。諦。

争う國別姓て越後虎と云ふをなすりや頬よら國今
さねくわらすにかくはあつて御所の主はをとる事
御世より人の佐計のとく差使を助かるて御ゆるみにま
きてよそよし押してあつすいこで主事よく計りて
あがりをよ於てんゆみすうと思ふれらゆるゆる言
えよく相玉の翁すむらか出でまうと幸にうるくで西
主よちねよと仰ゆけり御沙御あまの影すらおて思
ひの佐のりせ詔にねる間あらの何きすよ今さう
され小夢桂経の方大しお元祖も残れぬと極よゑあら
うかげけよしと同うてうれ大廻、よどものひけぬ
まされと多くんよからひとくへま、庭派あるゆる
幕がるふ是くとくいはうすまうすまうすまうすま
しゆ奉て吊り内原よつとゆくうううううううう
固別姓御事御事御事御事御事御事御事御事
沙城より遙く見立ゆるをすゆき

よれよ思ひよかふは今を重よ行ゆの次第也とぞ辞
のら石をうち植ふる所へ定めて主を治ゆる。作あら
年以能て去りて是下のより妻くや送りゆく又甲州
も志り。う往く是下のより妻くや送りゆくをるがのあらを
于時小者よ是下のより妻くや送りゆくをるがのあらを
中はうて別かてもくよ是下の鉤とく鉤とくけりて洞
沙城より退出せよ。今うふ奥原く業
内あくして居るさんと云ふ死不する尉ぬ候ひよ。夢くね候
まされあくして復縛くまくまくまくまくまくまく
左半世あくして賀のす。あくと云執すと云宣せ
まくやの役を承ふ。あくと云宣せ。あくと云宣せ
左半世あくして賀のす。あくと云宣せ。あくと云宣せ
同十日か又和泉の主憲相玉の侍へ詔じてやあ下りれ
詔あつて承ふ。あく若述の文あくと云宣せ。あくと云宣せ

後に者より下りても、或飛行して行、或走る事ある
事ありて、またね焉て、圓表形作と云ふ事と曰く、
是の日系よ入候くやと思ひ、
かくしてあくる年の九月朔より三月の先、改めらるけり。
昇進の役、胡吹を布年立候阿波城布年立世流云承代う、作員もみゆ以
前は未だぬ少子の事あるらず、或の後うなづく内蔵伊別
の事小僧牛馬といつた胡吹ふる牛と云ひてする摺也
とておはせのとくの事、改められぬ
沙経改ら作員も、あくる年嘉慶三年二月廿九日上る
御佛事の際、固勤て遅御の役拂礼と改めてゆるとく
ゆ通すがれ、かくいへんに、居業一人追かけありて
まゝのが來と遅供の旅と口傳小乃久警所相あひて改
めりと云かく、云々、旅の事本と之へて、居業改め、其事
を委棄すと云ふも、我住を改めしれども、其履充と
長物ねども、云々、思ひ、の事ある、と云ひて
亦よ多病して塔上寺の裏の下るの道へ下りて、病くゆつ

の故人芳酒を解て喧嘩、叫び、遂彼への下駄の町まじ
の因い捕つて
例と御成の日ハ町方力因に相候る
自身者所ふ入をりと云々、彼小姓の差遣よまくよ達勒と
而後なるを程、第、つゝて、終て宿候へ入りたるを稱して
主にて先帝は相候る百屋町御宿退敷はあくまで、傳ひ不ア
小達て彼下駄渡して、宿候しやと之へて、所ありて、御宿と云々の時移する間
御宿の宿候より、また不候車論とて、そなへば、方小姓と
がうち内庄門の自付の度も、其事御宿とて、不候を
何れ存候をくりとて、名前をかくす御宿候とて、不候を
かくすありて、あくとさす御宿、下駄を、中候の方を、余事御宿候とて、不候を
達矣あると、と云ひゆる、御宿と云々の御宿候とて、不候を
又相手方主附るゆゑす、云々に下駄を落してゆる

うれしにあらへ
而論減緩せらるゝや
吾妻重慶院
時ありぬ事ぢて近くみゆく所
すく後
數中より後悔もよ達されは終りまふ
もあくまづりけりとてよく歩ひてすく行ひたると
ぬ年の兵身にて接取せられ行ひぬかして
而後改九ヶ自動勤
て寛政三年五月十日延年、於會見も之を記の年後
して左をさし小井住吉相玉高砂サ浦の事書めし事あり
ねどもあ志きけ出ぬ只い
高砂者年号あるゆけ行ひてすく
からずやんと思ひけりうちふくまつて度成うちね
のうち日
印城よりいたわ
神保寺の小善清手引
とよりて之監今の闇ふら
作付

寛政三年五月十日自身よりてほに接み下ゆ
定佐相玉のひけ
わる封すのうち小醫の減緩のする
氣不ふやか
甲州へ賜焉せりすよなりたゞれん
氣の至りて
ひじはの太倍の金すとすにせす
てまわりくるんじてよしむを
伊の故ゆすれに是の印城
すあくに詮もむき

左力城と右作法も并て云共何の事あし對何をか曰
て没よとをよじてへりとせふ先程並ひのとす物をも放
て二つとも思ふもま存く者乎てこそゆき縁すもゆう
いすよりくへ醫師といふと云ふ差別あり候ふありうれ先
駿の滅絶の終焉をもおこすは望滅縁をら作手す
医師の滅絶の終焉をもおこすは望滅縁をら作手す
ほあくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
不約約やくへ医師不獨通鑑とめて後ハ孤獨よな。そ
が種族失へ医遠くもう又つ在る。この後有成
てかえどもなりた大所のつゑあくねえといましと
加へゆるよと達りまると義理うへたるをもんに付
以へゆくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく
義理狀をもうて知ぬ都てもうす。定例よ成りし
去就迷あらかじよへ經師の志へ親類よ不拘繩舟
林亨至らとくとかて何事よはすに事つて、政事紀
内こゝに後てもあら一聞小押邊或の退院をもて事ある
せよ其事よはせよ。非云主をも事無ふと謂ふ事す

一折うちの事わざへよく事跡うそ本意だらく全
又體れよそむれきがあらむをもあむと云世話取扱え
と会あひ立事小は見て紙のとへうすまよと既むと
とくす取れ後うと付く。踏みて事成勘くまと漏と
とくむるもむり。自化もくよ不様ろ孤へふやく只
く余づ漏逸放蕪みぞとくよく修よ取縁と左手す
よく、傳うよせよ左手すくよく修よ取縁と左手す
して水く縁を今くまくと云ふ太めらか筋よくも筋
くふくと傳て封すとすりくもくにて後醫師二人
が業主熱うとて滅絶せられ活士殺邊の事。一新義
はよむじうく成て医師を控す。安易よたらかく医師
ら御牛す
小要後繼元所當す店主配す。左
有嗣の序用す配別よ才経う定。右目之ゆりく。経當
左居あはと云ふもと解す。右には又経す小要

佐々成の死は又は魚を販賣の所を小糸作成が以よ
 て配二人にすら定められては又事多くて行成もろ
 いに成る。小糸作成は十二年成よつたる也。幕府内閣よりは
 中毒山へ小糸作成が民勤め小糸作成もあらうと
 えども執政よりゐるとかして終よ十終ふら定めよ民
 云々家とよべく家とぞ蜀で毎日上り下りする所にて
 とら減してア家とぞ成る也。小糸作成が以よ
 とらきしてア家とぞ成る也。前より往々くさびあひに足取よがりうだまを更よ用
 ようとてそく人ア家とぞあひすのと邪テヨ高ひていたる
 人ア家とぞ足取とぞして足取とぞしてのれしやくと足取ひ下すら
 おとすとぞみとぞ
 「ア家とぞア家とぞ成るふつけと脚假縫とぞす筋のそくと
 但省不以下斗ぐ
 是が左手の筆一世活不板玉之家を勧善よら尾井假縫
 沙先年活不板玉よ出づるがよせとわく

古文書あるとあるとあるとあるとあるとあると
 小糸作成の家とぞ守る旨の所を出ます
 仰面とひまほと下にすくい年假沙引と無事と
 箱と酒井周例とよ戸候しそむ。玄信相手とす
 そくうす。されば先手アリ。假ト麻あらアミ代是ト又脚假
 細と絆アミ代小糸作成が脚すり乞てナヘ被假
 三行アリ。此アヨリと箱、ヤハ世活不板玉者、ヨリ已く家
 箱不空沙引とあるとあるとあるとあるとあると
 されれ。上下うれとあら作有アリ。人並よ西假令
 とせられアリ。空かねれとて世活不板玉もよろしく又人并
 が糸作成の世活不板玉もよほ沙引と人並よ西假令
 かく。されば假令沙引と人並よ西假令の年成
 不空家。公私承代の粗種と云ふもとを並ぶとあら
 まく。沙引と人並よ西假令の年成の脚假を上る。おなじ
 芽接假令沙引と人並よ西假令の動であるとぞから

而の彼の御子神うらぎせをあらわしある宜委りた邊に年
のちゑとるがつて上弓もれく彼縁すえ後うそくほ
すまゐるあすく年端よみかて却て鳥とと生すすらうや
してつまひへをみ小善徳面をきれはんう小善徳お祀の大富
多あきらめの城以て役縁を乞まうりとあれいとま
とぞ封りとまうとれと是の御行上神みえく小善徳ま
船十人の舟をまかうつら後よ役縁とゆうらまに家
あゆうくつ又小善徳あひテのうり今まく人化の萬
動在る者と作舟アテニまの祀のうりと年世活成
うらうりと汝よめくら志ひ多かねれうち石割の神
はくえあみ船のいれよえ代向ひえ後る押度あらふ
ゆま云筋のうりと不ふるも配のと神佛の様よる
はくえ大勢の入室する小善徳のあを哉ア家とかけ
りねる石割をはくらひよ立ち翁が行路迷惑仕事
多く化の渉を云場と辛苦相難仰りそ無名者の中
く小善徳お祀のまの中にあ代もひうれぬ事の不仕

い押度けとえ石割の事、窮屈よ不ふる御子神の志は
よそりて甚宜ありとどる。トヤチ前、宣信相を大ふ
感はせくおて西あくじ敵をうまく小善徳お祀ア勤
みと見了る時、云はば化場所のうら、作舟相よ可
能定うのやうら争ふよりお祀の中う出立を被くひとくア
まちる化を勤うるを其城、仰せし拂れて答言も
見定かりるりんより争うる小善徳うらうら 作舟

海士の被縛の記 下

内目付ら作付うる際は子のすむのすむに相あはてれ
中華のあや小半せんれ大ひ事ひの様子に下小孩の後房
み五つ生て於を走試らうへとそと翁と中門より移
廻るす。と後走り是より外を一美妻の方にてま藏
のうちは家外くそ玉井事よしらへ室に相あは
すきりあらわぬ布衣よりお面とお手本が多きを
すきりあらわぬ布衣よりお面とお手本が多きを
中す。もゆるある事までして海士とも上位ありまし
もかね寄りともやまねてかどしうら戻もとて年大日
才も遠江の久間相主蜀主蜀主とて良辰とて數を出され
てす配所奉毛す。以下日と中間不相違。而も才小後を
けすとあらわせ。作付年は後遠よお見世す。改
横然は後遠河を貞臣。因多甲羽正元羽志。改我りくとよ
出もすつたれと考古不詳。とくもあらわすと思ひて凝葉よ
爲入をされ却て不知。とくもあらわすと爲ひて有

海城より宿あつてちねよ只いははきうち

色うかはわく今宵費。眞元日ふか。こみみ自と見
と云うと慶應年もちもまつうち小室信相主の布よ御用の
事坐。上うとしてゆるく良夜の秀絶。そりへれ。中す
里下のうちとふ而のくこそえくわくとて感。多あつ紀
は良家の祐世。すれど人をもや。久くは京路。すてら
久く栗山。之を。集野。義助。左近。おほよ。徳地。よみ経。良夜の祐
世病ありてそりへれ。洋あらうからふをくの。哥をうだる
わきく。やまんけり。う。美よ。お素。あらう。そと。あらう。そ
ひ。朝政達不向。一偏。おも。よ。今。か。の。哥。あらう。そ
へら作付て。おまえ。う。不。室。授。產。助。主。年。經。祭。是。當。屬。
屋。多。良。外。か。否。重。小。於。之。活。主。の。主。後。諸。教。成。國。も。キ。う
講。教。每。ち。の。否。教。小。所。南。へ。う。れ。あ。お。も。小。所。う。う
血。氣。教。傷。の。度。か。い。不。教。あ。る。根。性。よ。ほ。の。せ。そ。う。ふ。と。津。移
程。三。使。終。よ。四。年。と。う。し。た。る。か。う。四。年。日。と。内。よ。そ。う。

傳教せば是にて試字小出ちをめう多一 瑞よ去心も能
所のえすとぞえそて一厚て百も連へて字もうみゆり よ傳
家の評よりいつも書科又何かふ良字のよそ多年をも
て書籍すもと序く人極浅時も折るく勤士ももを
ひどもおのづくじと見減れすう或へを用よ連ふ不まも
主よつらも傳教の件よのあくとトキるよ歴すうゆつよ携
手の評経とくして玉文修よそ年へすみやうて言ぬ
傳教がすうの無なとく委試字の授業者主ふ主よく
主ようと執政すり見せくらう小翁の無度世よの人はと
試字の授業主ふくとも何年く年耳書籍しま乳
令く海 廉西よして帝に文武の藝よあくくへう
あれとけぬの所授業すもほつめう應答と考せくねあく
んとく評経へすやあくくくくと考せくねあく
あくへ一段小庭字の助けと成ぬ 〔文武藝の先生とく
あくへ作る者傳教アノホセモ道もく業、名へよすは傳
あくももやくとく傳よかまわく述せし所事すに

達せざれり而の之病へせぬあはま。〔揚角ハ國の渾よよ
るおれく出耳不來もあらぬ。〕而武士の字又傳家
の評経あせぬもあくへ〔大よいもの試字の序
よも聖賢の胸牛とみねとくも私よ傳教。〕傳家の評
には寛上よじきよくも平日の行ひ立つがほ人のれ
とくもくもあらむよす内裏向あつて才一世の人の生れ
生じ試字の裏取あきなむ却て方り仰ぐ。〔さうしたる
あ府の考今よとくして口もおもね風藝字すみとく
やや小口意のあくくめれとくの強不敵の如ゑ
上経後り字の代からして口もおもね風藝字すみとく
あもなにまもく持はる正教相を 時年あよナキよと
御も経よと伝教 〔傳家向よす方主は傳家すりヤ
ナキよと上科の字よ口傳教あらよとく風藝字すみとく
傳家すかくもり間の傳教すとく今も知るね傳教也因りと
后 瑞阿も 〔内ニ正教相を小ヤてあら後とて只以裏向の
于時傳教相

み
作済之事めぐらに是ゆりて是ゆりて
有小善往よら入るら 作済くら翁と石をせりしたる
信をのせよ用ひふまると学ぶの行まうとあるのり
事とも思ひてはせぬかと何の意あ
学の列より文ひかりそれとねむとねむとねむと
的南へ國の注筋う物う多と武
や兵船を以て日く小あくたれとおも
えを上科より上て學問の實相あ
めく殿點をくわしては世の成績おもつら
林學すすむわ我相あふるてく何よ石のねがおもく
いあふるすや歴古法家の醫の内の人のは實成
知ひを争ひ政劇の利を被て海の所うちおもて余
之天令也せん方れ病すれどくやりとて無くぬ身
と同一事なる也

寛政三年八月廿日

（了）曲園翁嘉望

于時^{當自付}御後壁御^御御化すまづりよきつて 西を以て沙の升形の
壁を被^被送玉をかまひて室便相^並の斗山^山を沙城郭とつて
有^有きて海^海國^國とく廣^廣に^に以^以て被^被被^被者より
被^被被^被かくしよはな^{はな}の損益^{損益}を考^考て^て被^被被^被が^が曲^曲を
考^考む^むと^と西^西よ^よ能^能く^くて^て安^安否^否を改^改め^めし^しす^す費^費用
と有^うう^うす^すり^りかくし^し小^小被^被せ^せと^との^の升^升の^の被^被
被^被小^小石^石被^被と^と加^加被^被因^因の^のより^りき^きと^とて^て又^又有^有行^行
の^の被^被る^る

故人があらもひるましに物ひくをひきあふ事の
りんを折りと往拂よら 作付ひそく空て被るへゆりすう
事にまへり こよむ様にてあ裏のむやけへ て急國とすえ
補佐のまれいよ鐵船に松年 桧船のありえども空す紀をじよ
獨角にわよ木舟を非常のすいんより 塵の上うろ段石が
きよとすり出ひより や豆下のア筋とよく語てアモリ
ヨリとすより思ふ 蒼梧徳ひそまえ封主とまつり
所の上うろちをすてばくとよすへ石舟に近ね壁すある間
てもくけ水井をひくとよせ傍徳徳とまつり はりて
経ふ浮うんのあら拂よへ聞くと 市左子の株梁をと
昔の経系紙をえんと小竹も大糸浮うほへどくんそくとまつり
まつりとんじくらやさうあは軍字のえふくと
まち生くらも大糸浮うほへどくんそくとまつり
経をせぬまよ取くと はりて拂の志がり玉よもと見下す
を簡先おあづけり てふきく成て隠居の防のあひに
そよ者すう種るくつとまつり 作のるふうくつ
や

城のすくかふて拂の上す て拂くととくに松
枝ふ枝とつてほくとまつ枝へ何をつきてとくに松
枝多用意せぐけくへくに又ふりきる枝の上す
たる武志くと大筋上く しもいがめ枝もせよまく
あくまく 一 築城のわくわくおて歩て敵と追ふ
あくまく多く内うちをくとひて防ぐと城の小室
のまほくとすこ者すへち筋あくまほく叶金是下す
き折えよる部急着すす 陸船をれ打うちける
あくまくもうちくとくあくまく城の陸船(おひて)防事
きくくく

翁うれ喜官へかりうつやを後船の升船ゑくねく
画をくるわくとく絃拂ひしきく 種るとくとくとくとく
作渡るゆくとおほき重病曲閣子附うがく種らばすは
翁ふとひけり、終よ翁うやかくとくかく種らばすは
やく千今そあう種る

下

も内蔵して屏と石板との間は厚角うろ元代うつねをも
あら成せ御被間とを被先うら後述すれどす何の爲
もるまじに假すすきの役人より生をすりも迷ひすうつ
井上至度を乞へ幸運の軍事を福徳の彦が善徳よる
てすむらうくうえ其彼充ハモキモすすふすうて不様
と浅み了て是代を被らう候すれど也地獄モセよ極
樂す。せよ年玉うんとおあら(モ)核へるもすゆ
南浦代官女の沙子後モ小牧多生身モせ核ひかへ四角
店舗沙乳母よ事なれと核と了求ら身をくわくう若す
本やすや御乳とあらちハ沙自己以よの妻

四角五方圓山羊乳小猪の御母の妻
との三司ひがたちに傳て御母を多うねくすたくね
佐よ大正萬小十人の西この妻もお母の乳めらだんの御母
有(モ)くすりて求められり

湯乳母のあらうひ方朝夕の食すハ角うの邊うみて丘陵
共自う冷ますて老う年うすすあにき可うゆゑふよおほく
中産浦萬圓山羊乳とを食て食らうすゆ(モ)一ノ經真

るやそあは哉だうしの女へは年食うまひゆうと
被をすも湯葉とて。香葉もくは湯葉所へ絆て
目見を含みそし呑みあうす。まくても圓芋るねば中と
乳色のわううて乳とす。あうすへ何ういふへ
小孩の志の裏あるともゆるき(モ)何う思ひと争(アミ)そた
ちあうね、あうすへ何ういふへ何う思ひと争(アミ)そた
うすうす里よやうて御乳よりち小。原御乳の宣加と
云ひわうす。三に月のうらふ己の乳とめりて主間がま
もゆきくももうけかくすて多て御乳より事と云ひよ。御
乳とひかくしほは御乳が生るもよれうてひうく
もも子の口つよおと御乳ねと語らう事よめうり。松門
乳よ生るをあううして迎むば、内自己よ生るもよく有
すううひ根をねつとも(モ)うちら。伝知て御乳と御乳
と赤(モ)ゆう

稚

粉

上ふ拂乳のねひ多々年幼を重んじて内目なうすと上と御嬢婦
の影をすり事後も「とお在へんたすあ御事あお合を
みゆくもくろうきりそするよ奉のまちあて御すやたとい清
祖深草もほく拂乳をくるまきくとも角す角を
君の拂あるうれいあ嬢すみるかく、かくと阿迷或すよど
まく下あくい御御拂の拂るも共て死ひゆけまくは
慶信翁との合よけひて御旗本の西と大名小矛より
姫と肩す姫と甚はあれど相意する御拂候よかう
間宮とまつめとけや」因縁して彼姫の拂自身と年もえら省
名うふ義へり以くわきる姫の系ゆるまほを御りく
居息て至るやう何ふ御宿して御も移ひまくと是
所から上ふお我助造伊努子千代拂名すなむの哲にて慶信翁
のち此情て年中の五條をとくにうしめよお弟す姫の乳
ありまこと幸うまく天涯か拂拂ふ牛久（左も又み於て）
彼

ねひよる候、何う足下の娘と入金を御卒行而ゆき布す知
事くあつ拂るよも成て、まよへきるがて拂乳よ生
まう「とお姫とおも密接あらよす年もをすまく
娘の程つづくとくとく御引てすゑ乳よゆく夕御
乳よ生くとくとくを姫せめの忠志よ思ひあらうトに
胡タのうづくい希よ詫むくわりくやふくとくとく拂の
名拂表もくとくせぬいきくとくとく拂す心すくとくとく拂
つづくとくとく
最も翁、御内村勤うりにゆくとくとく拂す心すくとくとく
翁被殊の志共ひ五年自毎よ拂乳よ並て大角拂
仕官し我とくとく拂ひてまくとくとく拂す心すくとくとく
上すう貴朝とくとくとくの翁ひ翁ひの大角と資後つて
拂古と邊がすくすつて田舎家屋井上を主に住まふは衣
被うへ清自らの見うら作付ひて御拂日引とまきを見
ひて御ふ武州西を往復をすよ好化あらすと立候胡のの如候
ひて御ふよ於て毎年三月自下の大角城拂古させくふ

而まくとと思ひ立てけりや何れより日目が許候
て立候をまつて封書とぞされゆう同役十人西をす
跡は身の所の同役二人教令十二人山縣とある所並じく
許はるよ萬小森川後尹主役千時冒付うえ出そひ文武の
事務もふまくに時高あまくをアセするみる平元
室侯相手の執政あらうとこをあ、また為府文武の事は方
とづくり候うれえ本すもよきしんすめの行ひわが
時移りすをそん候て急りけりきハ日のあよ云すての
也想し大角とすの伝承があつて辛酉年
公の費用と多くかけて候るく磨きくます事は無意味す
せたのと事多く立ち候ひすきのうじとも思ひとて之
大角不殊同音のア角と號すてせり。故くくまちゆす
よくよ立ち不す翁一へ方なれど高附補佐の筋合す
てま物とふ文武の筋よをも仰ぐて一日の人情とて弊
氣うけくさく力滿のよじからぬほ良人筋の筋も
きり内か一派共そ御所も残り事ア成吉門角ヨリ立
角起ると仕立事もあく依て立事もく時うめりく

廢もくとくの知れず事ゆく又業のトナカヒはとちの
多々と積みあつてとなむが、之で同官すばり中と面見す
簡くうねり九人へ一国の事のみとやあくへ足下へ入
別意の筋とあよびて足立へ一派のうちれ
あ縁を今もちよそくしふは百斗のを泣ぬ。余を立され
て徳組守の老共年を取次キ三百岁以下の大角と相半よ立
於て稅古もくにいだら仕立して昨年從ひて行か。布衣望
の所役人までゆるそれてまくにく
西の丸御右敷橋の下と極下四つの出部の立柱との間にあ
方たがく板下の方のひくくてかよう見ぬよす。鄰の柱
ああこそ若く面白とおけ。今う鐵柱あらかよだらう上
近きの風ぬよ吹拂て悲くかすり又遠くらへば葉のねう
小善後まり度そ本城より社村月日アセても候事う
ソリにまじひふ達くちの柱あ風よ吹拂て以て行あ
又す年少も候事うちゆへは度の立候をふもすやく

往ふまむりよりあと桂にあとも要寧の幕とある。此
いふもくふニシナハ桂枝古今も移人らしく彼はあ裏へ
行あ所すもから石と葛の桂あとえ博をはるう
植ゆる資を養相を執政よ成ては西下の委曲の表を養
植「名の後復せくわらう小ほ方々傳風と止て傳枝ふ
せくうもるつて内様田浦よ向て晴るるあみ
め荷ひきを芳」^{アラキ}や否桂千役の詳をやへどり
中門へ御うづて御自用御衣も洋服ともらふ医候相
候の重多の資を相ゆる傳風ともも裏内様田浦の小
向ひて同様すかうり小是もつら以長庵そこ称
トウリ附後の序毛とほりて是も、傳枝よさせくわら
毛は度信相毛のつて毛と曰けよ圓うすづらう
殿よ宣信相毛の裏表毛すやれを資を相を傳^{アラキ}_{アラキ}
毛のうそては役事ゆれも支考よ芳」^{アラキ}かうま
と皆云出うち中よ荷をひあして傳風す今

ハ皆兵ふ將もあらんのをひきもあと傳すがま見る
るす。云事もあらんのをひきもあと云義へ例す等て
在くらしの御内郭もその内所柄と云太毛の要處すえ
接とすも後とは萬すほくらふ空のひそゝれの年
又傳角もくらす根もくらすと見ゆる只つれに資を相も
重を傳ねよせくらすと見ゆる五極めすが「一せの入
一大なる表つのうちれの外と御立もくらすと見ゆる
あくね事ふんるみの桂便所下の下る之をかく傳枝よせ
くらす根もくらすと見ゆる五極めすが「一せの人
見ゆる中よくらす根を相即所持と云傳職の官毛と云考
判ではまこと止傳枝よしと世よよ示さるあく傳大考の
と帝傳す移ア付タ「傳職の長毛もくらす根枝と云ひ
あくよ却うて何事のあつて不あしやからかく
かんやえ出へた中門も感考「て資を相せ小因役

一の小津淺の上傳板で御す。中上うち小森の御殊
不などやし感ふはるよとやまくに傳つまう。傳
傳板よせりかて今もまだある。

傳板の事登の方とあらうとも利害あると云ひ、
ある傳人の手がかりする事す。やむをうち用ひるも

車。大津傳板も大方の用ひもう少しすこし多く
は車のまゝへと傳板のをあらかじめ送て多くいぢくと
え渡あへ可也近來の傳板の大抵をあらかじめ
送る事あはむ。傳板あ多き。猶支那日本と傳板をあらかじ
津の入出へ。のむ車屋とうりてたす間と有くる。
またよかうと傳板をあらかじめ事へ上すうら乞
いたる。議定すとあらや何のひづれ仕様するやうん
い。大津傳板の下る處。井戸の内郭の内
傳板の事多き。朝鮮傳板かの末解又は沙門傳板
井戸は井戸からくーと云はる。井戸の内郭の内
内郭のうち傳板の事多き。井戸の内郭の内

日本は衣冠也と、こゝもとののが日本のはる僕とす。
國せたり。孫は將軍の都城のやうな後度多きの館拿
手す。すと。許すう。方。伝う。さすや
寛政廿年。在多喜庵の彈琴列傳。是れ國玉在内
の傳。傳。ひ出來。景成ノ子。即ち。年。の妻。浦。而
傳の御用焉。て。傳。傳。作。瞳。目。の。そ。と。云。小。江。と。ち。を
武相。互。殺。房。急。止。考。院。の。浦。こう。ら。う。の。行。う。す。る。多。く
至。の。懺悔。あ。地。の。付。つ。く。う。無。舟。す。中。内。か。三。所。と。か
内。自。能。方。あ。死。の。志。と。は。ほ。び。て。す。ま。う。の。浦。の。破。つ。し。と
と。も。あ。ぐ。と。う。ゆ。う。け。う。ふ。生。海。或。の。波。山。う。ん。と。あ。る。あ。よ
中。内。へ。遠。え。あ。所。と。う。と。と。人。波。達。か。と。と。と。あ。ふ
て。國。内。前。川。の。輝。大。龜。の。ひ。う。く。「翁。の。身。も。つ。み。み。を
き。ふ。く。え。よ。つ。种。の。絶。ゆ。よ。底。を。破。う。浦。と。而。こ。に。続
や。か。く。ま。り。と。云。古。役。と。云。名。世。中。内。く。底。よ。つ。ま。そ。ら。く。と
あ。う。ま。く。の。三。月。の。始。よ。ゆ。て。同。日。の。十。日。よ。宣。傳。期。ま。

の巡行を仰ぐとす。室町とうら山より下りて中門と東
の一日も遠くさむよには戻とえを豆羽の天城越る。是と由
まで室町相模と往復し射場をも豆羽柏久保小少主す雲
の古跡のねあつて在所と云ふやうに傳聞。且日本五箇所にて能と
すをまづ上修因ともありて云す。射場の御室町城を
すあれや角すり五引五て折り、久保アニ室えて箱根城城
え移よ生て補佐と侍奉をまつて中門令せを以て室町相模五
かわされ三筋街を守て射所とアラカニふる雲の古城也
ゆき山をかづら林葉よ廣きを立地ありて射殿内直身
川と云ひテキシテ、御守りけり。室ふよまくあ寛がりうる山の
ち石もと、御守りけり。其かくう是山をそぞろうて
後うつてまゆをとく。人殊か天城山と呼べて般若自古の
あ代うつらふ。それで忽ちの様はをとく。是山をそぞろうて
いがよすま。まよはのあ寛のあ寛のあ寛のあ寛のあ寛の
やまとやふる。まよはの室町相模の旅居花程ある。まよ

さむるの感頗よ感思えれて日はの暫ひと都
事よりしてひを浦このゆびの金絲かく房所より持よ
是てあらう感よせとやめて箱根山越て移食と通
ひて宿よ先づ序ひり甘渴の拂仕あとと覺え下知
古候り右の方に石船とあてア有りうち小大も七曲と
戸様の間山浦駅、宿すと通塞云々のあれうと通
前後往來は方へ通塞云々のあれうと通塞と通て是丈
三浦道す城代あらじれど是いゆとゆてたる計
よりもちの自立候事もあらばよ人得可憐の事
之宿すて室候初也かゆくらしにまこと又所引
於此種今よりめうててとあけうちよ收ひ感せられ
てすれどこそアミナリ可ても考セリわざくゆき
されどはあらうとあらうとあらう竹うち人
の所居をいふゆはあけり、極く退職ありし御印
お寄の幕所をすこし氏御相手于時執政

罷

のやせられそりとて是れよ経て今へ西向、おもんそくふ
とまく花をそなへる、翁へ縫考庸忍うにま共高祖
の、かあねまわらん西向符フヘシテうらへ石門と有
格目よ

沖布よ古事記ふれし等室あるぬ
官禁よ計りタリ新しく作を都つあゆめに四字すえ
多めりと今より出るも恐ろくはよきと生滅の事
とやドけよとまむよ半財斗完山室後あくと
沖布と退き、ゆう敷のとく恩詔もひそへんりう折根
よけうじり宣伝相手の沖見符と云沖渡、内政管了
がとう事かわく走牛着年あつともんとかて公卿の委領
ある付くと稱。 沖布よ出しつてさすばくとくおうじ
左より我がう姓を因列の元着年あまし自和とひ
をきてそしての沖を待ふかうく 公の所の極るき
也と考ふやまわゆりうそくう付

後廟

古

沖代の沖魚沼節教を取納らる年と不川

と翁の三あく成ゆるもくろうのゆれどもあく

沖布へら 古事記附和爾用後文序。

看廟のとせうれうち沖佩の也とく 沖よりうねを

ゆくまくうちすくはくと見て門目自勤の年

沖布よ白日て 沖宝院あく一事十二音斗自体の因は

ハ云え立度多きく衝立寄斗も 沖玉度を御うきまふ

やくしと見るちよユ國悔あ語のゆるハゆうく

沖布よら 互をねやそらうねすあくのまくすのく
からう上へ考へて 公私成執らるるす や急沖跡あると

かがう上へ考へて 公私成執らるるす や急沖跡あると

かがう上へ考へて 公私成執らるるす や急沖跡あると

又かく事小吉徳さんとあるのかつてよもよもさう人を
候のとせめのまゝのと公の御用事と仕合ひて坐
ひの聖賢の心とお思ひあつて、實家あらばよほし御
伊豆相模の浦へめぐらけり。而て田安君の公子天下
の神佐さうへ役引ひしむちかく國のみふ男代を
うるゝ上へ我がとく、報部苦行へ九年、一毛ふとあき
れり。若能の足を我孫は差すてありく由の爲めひつて
行、行ふある日旅宿へ入てわんわんと坐て上へるゝ所
かくしてこそ眞忠よもあらまゆきと口の事のてねあ
あら係保三郎と云ふの聖人とつともて翁のみの眷毎方
の伯文也々う焉す成益と仰と云秋月半生す處子未年居て世を
辞正月即生す也。すすふをすのれぬと云義伯文の高孫承祖也

主身ハ鄧七十席すて候。成るに萬円を落和也。余の
はづのと今抄写の今抄写と來すて書伯母是ニテ及
そくの教養もとくふまの妹成井伊家玄孫神、千葉君等玄孫、竹庭誠
國と板の豪士と稱矣よよへてねくらお伊家の子。其後の男
女子出立してあ从と庭之房と云嫁の徒。元多鶴、如成和も
才育せられ、強手な手の法、家風小和の家と云
よう伯文の書じて候。後、和也よもあつて、あらず。そ
れをいのとすて、美門五郎ててのねを後伯文す。ちくかく、
和也も引して後和也の子経在庵と云ふ。お打傍て、肉外
者から上伯文の後室は姫院とし、左右も内家、外
やアモル。人あくたれ、えま伯文の如何ト此も、
もを勤めり。往復つ、放蕩るも、汝房小角す。出家
修業はま今多く、ハ汝房後、弟も後、女もす。出家

のや網ねうち小妻のいまだよと様しかみえうけかひ
のをうえすり後の方に紹介の事あるのところすよお
ぬがくとお母成長ねうるよ往ひて中とおきりくアムが
のう居まちをあらひ重徳とゆき國窮の年になると仰
とうじう様あるよと近ちく居まちのへなうとあれば
やうてあるあちからおはなはるおはなはるつゝおもとよや復
の巻ひひ至るよと三婦のゆを廊へ別よあをじつてき
よおはなはる院とて云ふて
おち紹介成事のうれうれお年金百あまは金二万あ
之の内うれうれとおはなはるとおはなはるふすと
彼女の金れ厚原もとくさうふんうの内約の金とお追
ふもえぞついたわつや残金半あ斗小取てあ
よを度へ三婦の手に持ひて翁と申すの下あらぐく
何すと内用成せくよきのゆを切てをほく伝教院を
けひもゆくすやありうる金れおうえあらうけ
ひく彼女城房で又体面すう金もて年よねまくを

ひめはう死ぬともうる
あひけりかぬす云ゆうちひと云ひて翁と翁と
妻夫の他文沙名生の内うち妻ひとくわとあくの程
よちあせくらと内約あへて彼女何うわのまおが
うわきし金固すう出で喜びとそれおはなはる三婦
お富翁のまく父の跡とえたらねへと計業郎の中
小やうく人をうねしわ城あらく南家とくま縁とく
且と信とすり應との内業郎の室とくまくとくめ
物とからをゆき以う父母のとおとおとがる國窮の
あもあははらむとおとおとがる國窮の
とくとく成長せらむとおとおとがる國窮の
おまう内ふるかの約金とおとおとがる國窮の
おはう三婦う洋よ送うあらんすまへとくだよと
今まもとおとがる國窮のとおとがる國窮の
お母とおとがる國窮のとおとがる國窮のとおとがる

アヤウヒトトモラクシヨリ、候。勝手未経て、縁の有
内約の令事、が乞而てつゝひと、候。仕合すし行至
海のゆきそり、候。之に知る處さうり、みれて、
つまて候。又、候。おとこむかと、と、ちてゆくぬあらじよく、
ゆゑ。オノゾの事のあす、耳。アタマするすうふ、候。
あくびとひて、内益甲川より、是よ御うそ、人金セ甲川も
益よましせく、れ。實るふ、今、急せん、差す。以公、内候
折りたる、也。甲川の後、なる殊々、假、序、候。院の下、出
され、うるわしく、翁、約す。お母、失念を不快と、
對あせり。假、序、のち、まわ、伝教院、坐念。何の、
片、あるまゆ。假、序、のち、まわ、傳教院、坐念。何の、
山の、め、後、うる、序、假、序、と云。先、まほ、あ、序、
お母、対、あせり。お母、さづ、以下、ゆきし、道、妙、女、五、
さうり。年、よ、於、て、年、先、人、面敵、と、云。あ、す、於
ても、いかず、よら。もし、承引、尋、難、以、身、ま、許

ヘ、お母、の、く、あら、集、人、事、義、法、で、教、あ、を、に、乞、
子、モ、お、ま、い、る、よ、そ、西、行、コ、乃、す、く、ム、と、小、ケ、フ、ゆ、ひ、ツ、
住、院、七、年、の、老、女、の、泪、と、流、て、抱、と、小、口、吸、云、る、成、
居、く、送、れ、と、せ、も、云、れ、し、て、ゆ、き、く、う、き、廣、の、後、
西、行、も、せ、り、し、回、年、の、十、月、嘉、政、よ、五、そ、久、章、と、
育、目、

モ、多、少、お、み、ち、桂、持、て、す、元、後、文、子、長、を、よ、お、食、セ、レ、
モ、と、う、け、う、り、と、て、け、育、へ、そ、人、氣、の、毒、よ、思、ハ、ま、
ま、う、て、お、母、得、入、て、不、前、方、と、ほ、う、ス、お、翁、と、力、モ、想、
是、よ、お、母、く、す、し、ゆ、一、筆、得、て、お、ま、く、モ、想、て、モ、
つ、け、て、あ、る、と、も、内、後、し、て、假、后、有、處、と、追、出、て、
石、宿、ま、と、お、も、う、假、名、宣、云、翁、持、て、ま、や、あ、る、お、と、見、
お、る、お、も、う、

さへあはれぬ也とまこと海紀をもどすらしく
空よすてす深くわが絆く婚姻とくみ絆して女の嫁
すう親の伴と離れて辛苦の中よそもたらし甲斐
よそ江戸をこころ候うの約金とろくつづいておも
おもぞおもぞくらうに歸もよほ後のあつを第あすとほ
て御ゆきぬま上石廢斗争ひそむるたうね事と歎
もし死はよひてニ勝ふすく、こうじて又す全武百駄
牛ておも、候くつくるひて年々くつくのひ萬千
令るひととくすとをも今へすらうくおも、ま
勤とちるゆくに成ね
まて親戚の後見者防とて酒くもさすからう目の上の
我侍アテモやあらむ相手よ成那く理り云はずせそと
是處のゆくふるく、珍めうすとぞ年とつとてお餘り
えよまつねあ、或ト活う意をあきみふ取てみ家
候う人の荷、ミカツ年、少く、年、也翁の内
あく早急に事あるとも用意トおもふくおもひれとも

お搖りうしてよれすりて年々家とお居るお泡
ひととてくを有み家すりもあくまじあら青とく
てあよりての家よそちよあわす事あうゆせとく
きとゆうしてし林よ信義院ハえ五年を始むて今書
頭動くア因爲甲州の知母也あらうかの知丈嫁をう事
醉歌あくつむすのれい行く思え七年の老妻浦
行候うておれのすみへにねどから程うら後うる
子孫のすみねへんよすくお風引くもかううて多
かうく
寛政七年春加役はもあらうて長谷門平元主宿
がまきを差め、自らて翁とおも被拂の役をら合ふね
彼も若門小さかと生贋よそ九年する加役動うら役
の計残めくらうしてあり
をもくに加役役門先と高祖うけ人代とうるのゆえ
拂人少すみあらうたるふとおも被拂の役をら合ふね
浦行候うておれのすみへにねどから程うら後うる

もとて迷ふ心のゆき押立をせりやれど思ひ見る
をの國みづくや長谷門の出るせくふると發くと思ひ見る
まじにス而のみ寺院か墓塚に建立して別所の墓塚を
といひ乃様よあれうす居ろと食えんと小折と多めの紙
あくまであそんとあげらうと
左生贋あらわらゆく宣傳相手の主あうて長翁より
國ありて石門修ふ人食あゆとある紙新ふくも立れ
すう是のまへ船の多成いまた全く不念して江戸中
而と小舟扁舟の主多くり居すうと上船を刑事と消
トウは坐らうと浮遊をうされば、とて又くわすくへかかゑす
してあつて不すと難ひゆうの主親の家を定め
是すうして江戸中皆
大おもねるを爲ゆるを 上より食とぬりえもえの仕先
うち量とぞせて脚あくとせくわく
度よりは法ありて法のまやうをきかくしりて

頑鬼放鷹する仕事のよきあらゆの舊傳の筆がつて序ぢ
何す何人をやれる事圓のと付て御家をうけたてきるる
そくはよく水玉と満うる御引致ふやくうみの水玉と
え世よふ落沙はくう御傳の者たのは業よふ米と搗す
ち子あく小酒工をもくも残をちくで何う紙の灘う下ゆく
後底とぞ是とせよ云々としらうと名の印のとくとくと
阿波を海(き)へ出るがせくうは長谷川ゆゑて残
のを要する
かくはて後(き)へう九年、間松のき計とめくじてあり
え事御制極の目あけ岡引と云志とすくつかりゆく
よ多きうち大盛強盛をふと批判へうあり
方かくはて世上に却て移やくかく大丈年と本施乞う
されか代りくして主成子のうすくあ門より付て
彼生贋を行ひうる冬とし年加役をう作付よ勤勞
の嘉倍経費はる事あくわく大因運八度度る加役

作りうる付大は罪候へまろすと、作りすぐる
うるを候ふ者思ひしに搜捕の職と令せられ
代役候むる役目より人の免
印から小へ徳をもらう付くと思ひて先
而事候候捕つるすと、二つて我役より是れ不^レの差
うかくするより日後考候候つて、我役より是れ不^レの差
る候ありて、急きと有て他役すり別々と入替り候ふと
ひしきお是れ目がと多く禁してあると不^レの事はし
代役候ふやのつとまくへ石捕をばあゆる事無
りと小罪よつくちん多くして、併考計候うるす
長谷門、すゑよすりも聲るすなゆうう大徳大付
の件

内代古薪候望多御宿在事とす、小猪唐家
經手と申候して、定よ少とけい少すふる、一付死
タラ御候高見助候、防候城ある程、候様子を見渡す

若年事立へ封手ぬ候事あり

か所迄候しの移動

小猪れ候事立ぬやう取引の人をおひやつてあ段
やうだら也
ちんと何事マサ御旗平の事人の仕事すらともし、如意加役
の事すへたケを捕たれ候りとて、ひ候能候もす。町奉行
よ成る事少候も、海からす並候がくと、志をそなえと
じくとめくと、何事マサ御事りの事よ、やあと
加役方より上り、猪又長谷門の付のとく大丈
なる。つゝく或は某所をあわせよ、猪又長谷門の朝邊を
達て、足りの加役勤うるすと、つゝくれ長谷門の朝邊を
ちくと加役と勤うる事山へ王邊をすらじとをもとと
す。猪又のアシテ、うそて事山へ王邊をもととをもとと
えも再もあらうて、御仕を御候のあの方すうほくとおと
う引消すうれいとをあらす年、たゞあら記日あき

沖役勤る志のさうありて公廢れ序もあら様より
とくに忠よむ於くあるを義小から多く是とすとも足宣
を立間毎月をとくめんうわくとくかくは初め石目を加役
ら作月するよりの事共委あるが爲く清廉とす
ま年勤の方へえまちるるれいを高め加むる候故乞
つ第とす年勤の方へ作月付へ迷ふ候きもす
又定めみ加役代と記るゆりたまは是とぞ來らて
序或加く日縁と除く

但而左見の状是とす御も御厚と云ねゆうとてす領役
石頭（よね）机硯席用の御もとあくまようとて承くは役
つとじるの序もとがし接よまきをね
後ま代と修へ候ゆき候ふ可也今も加役勤る人（ハ）被
ふとて公廢れ年もと取（レバ）年余り三年のち自三歳何の
ぬく加役所乞あつて候大官にたら作月つり役の
者とす桂動（スル）甲斐（アシ）を引くとから仕合（ハシマ）わ
かりくさけよ甲斐もとるもと何を西はすのう接ふ
至るわくも搜捕勤牛蟲斗（カニムシト）あやまつしきとを四目

付つてあ席（シテ）一ノ一表門主候、公廢れの主とせばとして百年
斗加役勤る事も無也とぞ第ひつては役、うなづく仕
ふるうんと候うばすふあるこれ、因と聞合せアレハを
仰降るすもと、般役入、内役よつけて加役乞そるふ
すれど、うち岩石石の正倫（マツリ）千時四助候は、翁と至の文
里まで殊よ近焉吉左衛（ヨシザエ）奥井在事（アシナガシタ）みちのほと氣の森山
ハ、うわす事より加役少もあらず、」と仰み、すよやく
王めく何ぞ森山よきうる、只般大官小加役させと乞ふ
のる斗也とぞ第ひくとて所例のくみよ便（イシキ）やゆう
のくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
般役入、太無事とぞ無難年季あれと氣よりくは任せと人を
押すもとおね年久を度候の長臣（ロウジン）井上伊藏（イサク）は自く
小妻後（シメガタ）おねよおねよおねよ余り田所の長臣井上伊藏（イサク）は自く
御役代（ヨウセイダイ）作月都り事もかき向たるは松金と後補（ソウブ）かしあね
ち男也空手相手の狼政（ラウジヤウ）があつてハ翁く思ひよしとて、
くの役小沖自付ふとろくとて候入（カニムシト）沙門（サムライ）あひじく
翁（シテ）あくらへ酒肴（サケヤウ）とおまえを壁所活（カニムシト）しろをあ

又松倉の手にまつて終は山陰にすら出生しません
かうある所親政あつて宗家正氏が朝臣をひきとて復讐
すて彼がすら戸田家(妻子から年下の)おうちおふく
ね食うやうで食事とううけんきけんかよ終は何すい
なまじにか役引船を積みよハ接げれそそくに出来たる
國朝を立元徳帝をもく羽毛を立候するには別西の序ふ
ちよ病みやこれうそくをすり接國朝の接入後
ふじに強てやされたりの接はる西朝毛也也と見え成教
相手の打合せられたりもや西教相手の接入を御やこれ
毛もんすり組子とえもふるす事へて已の組の引合
ある毛もんを捕て詮方もくほくつこかくし毛者ふる毛
引そくせを既に御原毛もくほくよりて百日の間つとを
毛もく御原毛もく所五箇處(入て酒を呑みつとつうゆ
る彼毛もく男毛もくをもすりて行ひたれども

加役つむらすすら居るふゑすら刀城賞定て門の強氣
るまで口井くたすりのみもて廢人(水もくを絶つた者)も
はつと飛ばくむくちを走る車輿あるちよだか(遠く)
ゆけりけりのまづり故い前を引くとも云又俄は大熱
とがひ出しがひ引立くともつづつと付き衰歎
八年れすすすく成ね

雅びらより 作月ぬと度因役引一 東山林庵うみ
小役うなぐは役長庵のあとの寛よ布うりし小楊林根
てあくか根のくくととまけ(今)御役(を)まくへせ有
森山深る夜とくとくして毎うたうすくすく。何と
事うそく夜とすくとくの如くの如くの如くの如く
くとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
加役門とむらひ十人ひの二浦和水すら翁ふ翁よ傳々筒
塗入(加役の)加役(加役の)加役(加役の)加役(加役の)

おもくと射角はんとそり用ひかく例の松余
よとて多じらされ、従へよくあきらめと知り實意
とす少いの事は、自量のものかく、後より海
を役ら。作付たる時長谷門を設立の動す。と作付
くわくを役する経年より去間傍人を教へて、おお十
猪國人五千人と仰つた。一と申出でふ氏教相を正教
胡毛のう簡すて長谷門をゆめ十強三年人を勤むる
まろく不至の所、川に水を知らず、小怪とがて見是
越と云ふの長谷門の例、あまり十強へ少はなく、一と申
みすり翁も見るを思ひ、うるを角もすゑぬよほせう
て、さすがに在役の勤め、かくは沙羽のひびくと
は戸中の大村監城と改め、まことに其不居へた也
不若りて、かも三千人あり、不若く何ます。
上の恩賞は、沙羽といえずして不若く、何の事か、
て大勢と仰つて、まことに沙羽が、後より正教
胡毛の事、ゆくといふか、とぞ因ひすべからむ

故モ冬十月桂入よ本年の加役を。作付うし小桂入
強勢よれも、中と只、兵士捕奉さるくと只の
外、うをなむる、沙羽も内に敵を、うの内役をせりぬる、
胡毛の何を多くは、信濃の信濃胡毛率より、沙羽の信濃
后役うしとすと、桂入よ傍人八人詰り、ねきて世の中
肉卸沙役約と沙夷害の而、種種を替へられり、物
あすら減りて、取中うす今、とやせと、乃ぬ本年勤小役人
ふくらむしと、そよる日、大よくも、わく、不役て、まことの便ひで、
何の害ひうむとすも、あくべく、不役て、まことの便ひで、
多く、沙羽と、偏頭よどて、沙羽を、沙羽を、沙羽を、
氏教相を、正教相を、沙羽を、沙羽を、沙羽を、
ろ人の心の、がく、沙羽を、沙羽を、沙羽を、沙羽を、
終て、沙羽と、元氣、沙羽と、沙羽を、沙羽を、沙羽を、
きて、沙羽と、沙羽を、沙羽を、沙羽を、沙羽を、沙羽を、

十人で物すみしらや寅辰五年に定信朝を退職あ
アミヨモト呼モ止ムラシムヤマリスヨウモア
呂の牛乳はせても多ハシタシタシ而日勤モリシのアリ也
タリ万子の費とニ有ヨリテ活向の役こも高耐不角子
ふくら唐う隊也アリタリ中ふ吉板百日目付と一年後
モラ 作りて経皮紙やトキモアリタ

一年あがの伊那の時あがめおきてう一年活也アリテ
西候あつばとニ有セ考ト春秋あがめ文代一たら
氏相朝也の御ツメアツシナシナシ中川忠英千飼御身家は
誠うつ合て古モ一年春な 上候をもきそく例と候若
かうすれんや景やうりたれ、向の候よラ 作活アリ翁
母アリミアシナシナシはよせしまへる葉、シテテ豆ノ而ある子
忠英よ向じて柳大坂百日月付の既意の者よりかね
忠石も之と一年小六度完 上使をもさうと事アリ
本キチ松ヲと一年活也ふら 仰宿ひだり屋敷の主勤
圓振ヌ歎く、シテモ拵の足下ふるあくら空くゆる

由るれやとつて中内も和モ是下のヤシラシムをも
考リテ何様モたもあら風見程モモアリモテ
止ぬがこそ事業テテ諒る、活也の候事とんがう
タクル、候て補佐の前、先も大坂の百日月付一 年活也
作付モラ。承りハぬ彼百日月付一年には完矣
中従業仕ひとよて海道の情有締よ成りリトシハ充
め何よリとヤセテ補佐の候れどもよせ荷浦鹿取、
伊豆相模の阿シテ、巡見の而とよてサシタル而の者尤何
すもいしは牛 どうするも、水の百日月付もそし
旅中駆りあるるよも多キ、とおれとえよもうされ
あよやくと浦 こそいやすよほのみくもとて而の
おをいかしてあがめ核より待つまき復旦元四日付と
一 上の申自代にて上下ありはりよもりりそく
いかうる活也のを計とすていかがるる、活也
も牛と叫びと只つてありて而の志を説く將も事

食の不外四五六緒よ成りを去年川口見もかみ城ノ原下
御書信出来業もとてお役との事より事にて主役の方より何を念と入りて知るからすようと車とくし
四尾日付とて小教年川口書信功をふと刻りとてみゆき
ことおも伝とて大祥の事よりえん御用射の事とくし
行とてあすと因との緒をまふ成り而等宗の公と通
程とて門と出来業具るうこすすとてよし失御
とてつら 作り事の沙純日付南条聖
うもや人五極の事とらあとてわの宣信網を
かて悟つて頻ううつとて假すれ、氏教網の布設
よて中門よ相後ありとてすちうめうと云ひかくを
ゆきうるつとせら感きうりきとも公余出く
くくねを參む候と今よ一年完済は萬代高木
候初より成ぬ

此す御便事のうちてねの心事へ行ひをば
御城内とて馬鹿狂歌聲とてかく食宿の後今よ行ひ
聞きゆくもとと足りもとと近後小室を出

中門よやくとて中門よやくとて云ふ者も一年
書字りとて志く書を伝せん書ある間にあか
いづくいづるよへあらじや又毛小引くるすあく紀
伊稿長つる日えきり勤ろ以て信頼す由意あつて
上貢日えす政事ある魚もえなう年と神石の町園窮
しきおとくへある事代長州の空役相士よしと
考え成よすほ日え年宿若かくもむらに下りか
ら仕出し税りとて清けぬさけねすと負担を
ら多くあり事めに不そくもとてゆ役（四萬石）
於此事大神九日家の勤職を務つて多く年俸たうう
彼神石と族宿とて弘年の間ひよどくもとてせきと年
立勤ふほら定くめう甚毛派のよしに清所山
神威あつたすて御子不降不將すとあらう天狗の
と云おのけほきと年宿の御事のまくをんと学びか

す者よりもむかひのやううきうされ、まじりの種文書を代
あまむらのむらのむらのむらのむらのむらのむらのむらのむらのむらのむらのむらのむらのむらのむらの
方して長日ふるぬるするれ、す年代りとことぢへ定
らわるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
せん 神助 神符のえみすくわくは木板のあまの
立動立動立動立動立動立動立動立動立動立動立動立
の次子小 神威も素て鄙俗丸まくやく
神官は何んも思ひぬ様はかねくへ一様又後人筆語
と不鮮明後すへり、行様のわし入年う是やまく
神威の教うううじも傍づ小成てほへ正一位権衡太政評
同事よりうとうううううううううううううううう
口先、内倅代よりて海房のほね候故胡セ干時を承
とえぞおもづくらはんくらはんくらはんくらはんく
百日目月もし因、御くせは、絶対奉うら、乃の高
札制れぞくぞくぞくぞくぞくぞくぞくぞくぞくぞく
四万八千石のひで、行もて、海つめ、あるく、とくとく
ハ勿縫候るるるるるるるるるるるるるるるるる
ハ勿縫候るるるるるるるるるるるるるるるるる
ハ勿縫候るるるるるるるるるるるるるるるる
ハ勿縫候るるるるるるるるるるるるるるるる
ハ勿縫候るるるるるるるるるるるるるるるる
ハ勿縫候るるるるるるるるるるるるるるる
ハ勿縫候るるるるるるるるるるるるるるる

直すも空氣を失ひずまか（レ）も上五一年間を度す
うちふくやも到ゆるも難（原）ねえを失ひずまか（レ）も上
京去後の町へえもくらへぬて之を乞て相づと計る
處へ、独りするもももくらへぬて見頃に偏頗すら有らず
えくへ、云ふ昔多々、核る程と百日目月をして足と呼
日教ひるき所と西向北向の立ち移りける
寛政九年の三月十九日、奥浦まみの出令はをも用七月
上院にて、御出で、御御流の室院はあらんとせりと
古基、あれど、御御出で元封也あ（平易多處すと井戸等
言ひ、 よすもどろ、威神遠見あつてすら、至る（あと
うきく事あり多き、

者へ何ぞくへあれくへ、一統よ右年を元浦尾もと吟味
あつて、耳てかるをもが、従うくよくよくよくよくよくよ
そと御と御御御御御御御御御御御御御御御御御御
ねをもととととととととととととととととととととと
御死ゆえらか、古基更教極うせよととととととととと

書とちぎれたり。洪武丙子秋之月。左司評
判一たる。すれども去間親執事と生まきとの間。若年。あうち
おち。所處の多用。人。ス。の。い。ま。か。わ。て。輕。格。と。送。る。す。
夥。多。く。そ。う。を。お。ひ。の。陽。て。せ。く。よ。ま。よ。あ。く。か。い。と。し
け。り。思。つ。よ。若。年。考。屬。官。の。所。ね。ふ。て。探。參。官。主。ふ。事。す
て。の。經。格。よ。う。る。よ。く。ま。る。え。免。も。角。り。奉。ら。る。應。死。あ。し
そ。か。は。う。く。不。幸。を。す。思。ひ。の。外。心。か。す。あ。つ。る。る。す。
と。も。丈。ぐ。彼。こ。の。見。在。ひ。よ。そ。ゆ。今。休。よ。不。知。う。る。お
あ。い。わ。府。部。の。ある。る。」。抱。る。ふ。上。の。門。遠。見。所。
素。裁。み。ぞ。う。て。ハ。老。成。よ。限。く。ん。内。あ。の。と。か。く。て。忠。代。
え。ま。く。と。せ。同。か。く。と。あ。の。ま。の。門。控。す。か。り。了。う。
あ。の。因。み。オ。ハ。済。う。く。わ。何。ほ。く。と。お。到。修。の。あ。か。く。く。あ。動。も。い。か。く。く。流。裝。
経。度。も。そ。う。く。お。傳。の。か。か。く。く。す。動。も。い。か。く。く。流。裝。
前。か。く。と。ま。う。け。る。」。後。の。そ。く。の。さ。る。す。か。く。く。
物。故。の。へ。と。始。ち。そ。う。く。て。傳。め。ま。く。く。方。り。ゆ。下。あ。く。く。
の。付。づ。る。出。店。す。す。原。幕。あ。る。よ。底。ゑ。な。せ。く。く。元。解。業。

のまく城

丙子。古日。煥。子。盛。年。上。攸。夢。候。よ。て。暮。難。御。幕。院。の。松。翠。因。直。民。
持。墨。有。よ。く。あ。れ。翠。他。也。直。民。よ。う。門。あ。う。て。少。上。ふ。不。知。如。ね。そ。
日。の。梅。林。極。下。の。御。門。す。と。翠。高。三。上。因。舊。宗。奉。石。等。
云。念。せ。そ。而。先。手。動。方。傳。定。の。あ。く。と。ち。う。く。て。今。合。あ。
す。ま。ろ。往。暮。よ。相。共。平。暮。彼。序。よ。出。つ。と。之。而。役。人。付。す。
半。院。御。門。つ。と。入。く。る。心。よ。予。う。タ。ク。今。日。の。や。つ。と。奥。の。
四。空。あ。う。て。上。に。の。上。魔。而。と。る。成。と。る。ゆ。と。御。
は。か。く。る。ふ。す。小。糸。か。く。打。る。ア。モ。没。ふ。ある。魔。死。す。せ。れ。
知。魚。死。す。す。あ。く。ん。ト。る。せ。ん。も。や。く。と。う。そ。荷。せ。ん。と。
即。く。う。る。ス。の。魔。い。た。を。ま。し。ゆ。お。行。ふ。と。お。布。中。と。行。
を。の。魔。の。と。そ。から。ち。り。う。り。行。ぬ。上。魔。而。の。あ。よ。へ。そ。白。
石。ま。る。西。の。佛。人。難。人。不。大。勢。集。す。と。あ。る。ふ。ア。ヌ。

さうる時もんのむらうれすひゆめりて群小林史役下
事うぬかと幸ひて同才を慶幸坐少羽戸
作部うて後志月あつて少羽殿わらむる松平義萬
年城のくへおとくふゆうがまやかはきとを
わのすりきてまくつさくめゆうすそ是下りんと
四邊にありとつるすふ 上の御西城 四邊もあつて坐
いとまうすれ我が遠てとえるとかくすしりて
してあると 沙奈あらたうとふく親丈の事をと
あくせく都下五ヶ小けりまこそつらく傳づせら
きまる。毎年の通り者衛龜公之又す
速伯玉の車の音の止む残雪の如くし而すかづる
あるもおうゆくも
あれが翁の生の被恩わらまふをか ゆゑ入くるは相
事あくよせすも以とあらわす云れくうくええ
翁もせのとくやうをあうとく云ふと被恩の
事常小姓ゆり、あくらも之上の物あくらう

翁と見ゆとも家のゆり人の行葉や東方の國す
ておほの内を始終ゆくは勤がねて頼るをもむれて
いはくら城をあらすあり又大河島二年向すき内とも
候候ゆきの事より小善後よへくわざる人もあり
計萬三千年も勤めりてハマるすありても立身して
と孫文沙波のゆくと小善後入る役のすいかとあ
寛年被候の事城ねひてせすもかねまほの通
ヨリゆくとめり退勤したるへかるる収めうちや仕
を余れぬじしらやくと多の居りてあらう
或は嫁酒よ瀬き遊くとよあらうと被命する多くあ
きおひ名のあわる而くやとく今更事よあら
おのれの被才庸兵の在定信朝の被取せりとくに後
生すふれをかて今の大殿あるをうせへいゝくもろ
汗面無心のむといたすらあくとんじらせすまた
小善後よ成るがゆく被候を全とあくわひをさく

沙役多御うちまち身は室信相毛の報政うちつぶの思毛
もよしと登庸せよふと川と浦とのまじ

御用ともおもむく志月の役

君穂すあつうしふ彼相毛退職せむれとあくろ
年三月御毛とよかうめぬきと我身れも候毛白附
向毛きてはある人の思ひを重んじ事あそくわらひの
いあれと假名とおひすまよりつゝは旅のゆゑ
仕毛とおひすまとおひすまとおひすまとおひすま
あくねと庸せふるの黒彼毛やつと毛も又備のてえ
ゆくもとくとえとえとえとえとえとえとえとえ
偶うううううううううううううううううううう
庸人、賢哲うううううううううううううううう
ゆくもよらぬては内國外教毛の戸よすりをあやうふ
ちよち中門御毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛毛
象眉して追五毛うううううううううううううう
のうかえ相毛とえとえとえとえとえとえとえとえ

小秀吉あはれ此て中興御事す物せむれと見ゆる
勤九度と松平平左兵の中門者、小秀吉が勤毛了
る所とく五ねじ殿城の御するをめぐらゆくよ中門
彼うて小秀吉あはれと家すあくうる時、彼うてと
中興よらねたる後ろ、先勤中はとめに相毛からく古役よの
徳ひて殊よ松平とめに業よもしおもふるの翁
うけひやさく、小秀吉て勤毛と信成相毛の彼う
のうねくらるる翁よもしおもふるの翁
のうねくらるる翁よもしおもふるの翁
ふくよも小秀吉とめに業よもしおもふるの翁
河うね毛の素御毛とめに業よもしおもふるの翁
必定御毛とめの列毛あらうとめに業よもしおもふ
奈良のあ民算は毛毛とめに業よもしおもふるの翁
て氏相相毛の往後毛とめに業よもしおもふるの翁
ね育才百人入翁よもしおもふるの翁よもしおもふるの翁

四

見とゆく自分身からぬを爲めにゆえんとふらまつての中
中云々す。あやと後ふ思ひ今もす。はるま家民殺
相手の事をして大抵あてあやよまきりけりてやうく鶴
鳥公アミテ翁もす。奸計はまつたす。上更何役罷
をあらす。せよ。乍に逃走をもと自分もあらう。かく
不居る。や。送原はねや。そ
先ひく。何を。竹。多く知つ。要のとく。但
も只。種。け。れ。を。夕。多く。夕。多く。夕。
林中川の。自分勤る。日。ハ。殊。よ。空。高。相。の。男。傍。あ。う。と。角。れ
つ。日。も。内。心。烈。直。る。奸計。経。ひ。浦。こ。唐。角。の。見。し
豆翁の山。と。海。並。小。て。旅。翁。も。お。せ。ま。く。お。ば。づ
の。旅。の。と。見。え。相。と。不。居。ふ。れ。す。と。久
の。旅。あ。ふ。意。え。さ。る。被。押。入。て。空。高。相。の。山。考。翁。の。ふ。き
く。う。君。旅。翁。の。ま。す。仰。仰。大。字。の。考。翁。の。ふ。き
く。う。君。旅。翁。の。

中されまほろばは元は内へ御はてどもあまくもやまと
成る所を移へ乞ひ細事もおもわざりや
陣と逃げて行きそぞ見ゆ
魚紀本小しつきよりやくうわらうえ浦
はなひつるすよせ執りの族りあ
てのえんこそいゝて所はせんふ、
御不^レ御自村也少^レ自村
はかめうち大内海ぬの^レ云ゆ
見事の序修内^レや下^レかみくらす
余^レ有^レふくらす、二日のとつ
余^レ修^レは遙^レて止^レぬるに^レ御内^レの附^レとや角
よ度^レくそ手^レ用^レのうとよくおれ^レるあう
迎^レそひ廢^レすうん^レて相^レのまとかま^レき^レ言^レえくらむ
うとよて宣^レ傳^レ羽^レのままでせんせん^レの通^レ羽^レうう
あくしよる奸^レのふとたよ^レすれ程^レすれ程^レす

傷れぬをう今年の秋中内討ひて唐船と作れて
沙船と改め昇ね盤かまくとら作廢をう。一
ありゆるほくと思ひのかまく船の徳かまく又
中川、からくまう教あひし執政達びまくして造り
みうちうまう今そに候者否ちりて武用やの沖
あひの船子造のち段の橋料も減中に唐船を造
らしき行ふもやす唐船の作りを宣了さくせよ
日暮國中沙船を唐船がほめ造りうまやをもば葉種
さへて承受け和菓とぞくはく破被板のねまくわ製
城示されても舟の英國あと制せしるるより小倭と
以て 上城下す。一已ノ願外しろん忠もと多へや
た古き、船を求ひて武小造りとるゆゑれも益の少
きる。一、わのと石舟を造ね盤かまいて唐船造れ
どもとくと云、斗火船をよとてきりの舟のう
とくい御、テ、あはへと因役のすむれの御、
の意の御、テ、又般便系小たよことれで云佐

あ送をもむれ、沙船入角と竟一四年を終ふ。是
定信船主天下と補佐せられ、より推舉賢能ふ。よりて
親疎も接するに葛莞の志す徳能危の志すあく
立行胡セ退職あくすり人情忽處りて推舉賢能
もじく、皆手何をばくタの言義説め出で御行ともも
色無、唐船にうる者をま是我といふから世中よ成
りて、翁も此度、い斗もく、右職よあら事のあつもせり
ねの白石翁のわく、第よかづらうとく今ふもやえと
め夏のこうらして

世よりむづらうむづらうの者あすのたゞの姓ももあす
千時寛政十年八月先鋒炮擊郎森山氏達平孝盛
六十一翁室小於て時泰小革と也

閻枚子

贊

騰寫ノ書風マコトニ善シココヲ以テ亦誤落モ少ナシケ様
左記録ハケ様ナル筆工ニ限ル丁ナリ

武翁園座序
下户塙村
高森院

